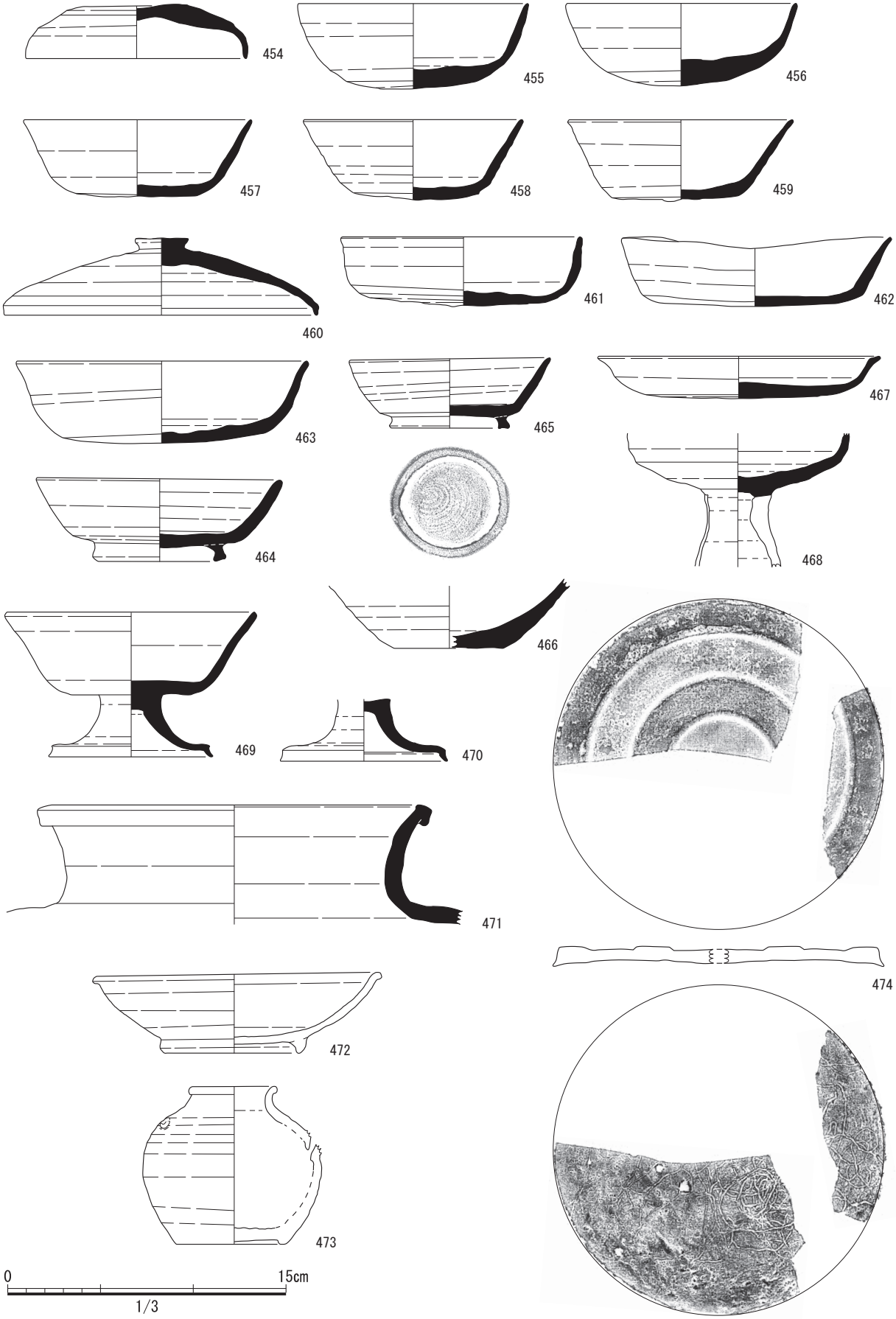
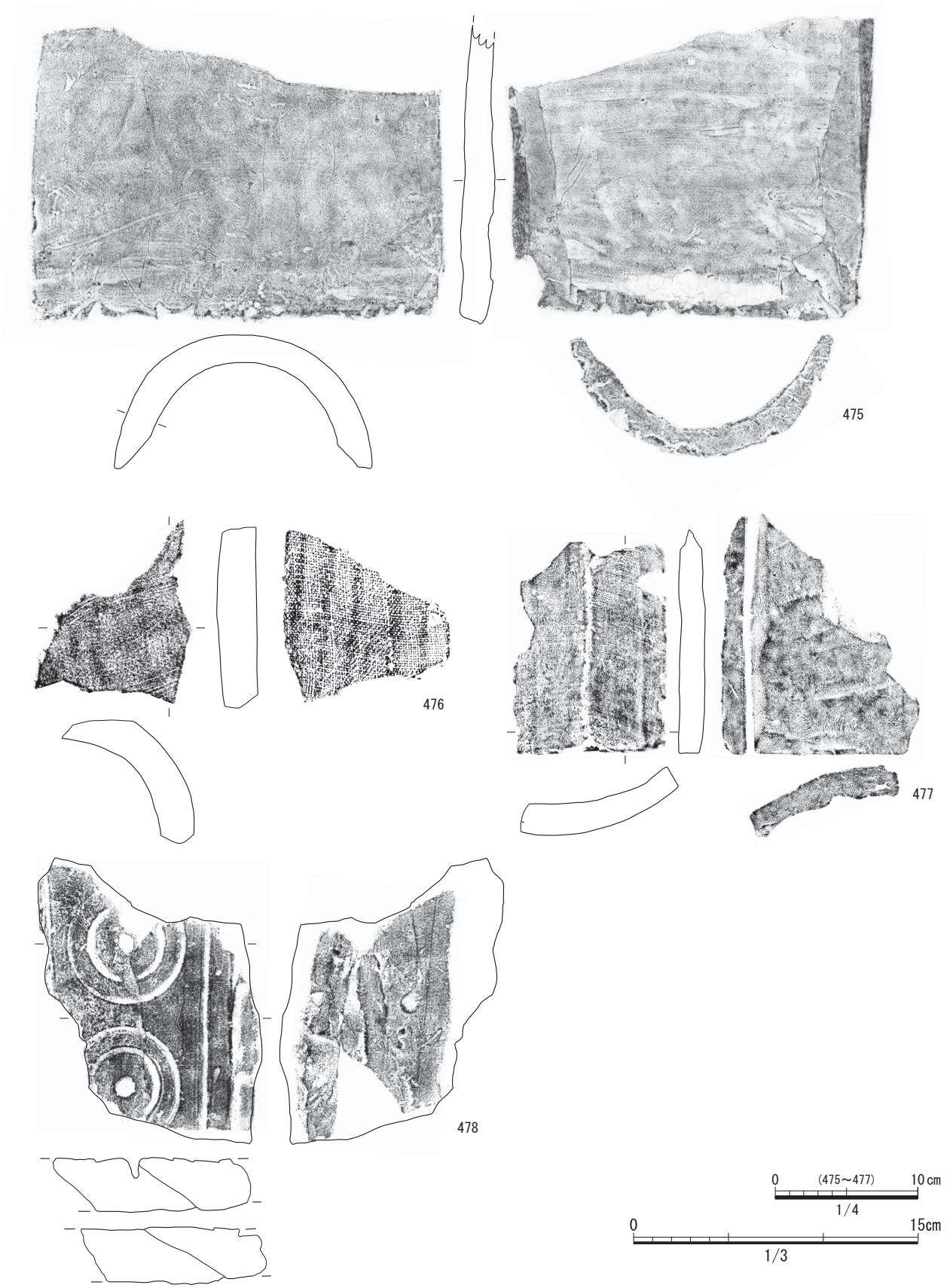


第 40 図　下野羽根坂古窯跡遺物実測図（1）

454 は杯Ｈ蓋。推定口径 11.9 ㎝。天井部と口縁部とを分ける稜は形骸化し、口縁端部は丸く仕上げる。7 世紀前半～中半と推定される。455・456 は口径 12 ㎝前半であり、口縁部はほぼ垂直に近い



第 41 図　下野羽根坂古窯跡遺物実測図 (2)

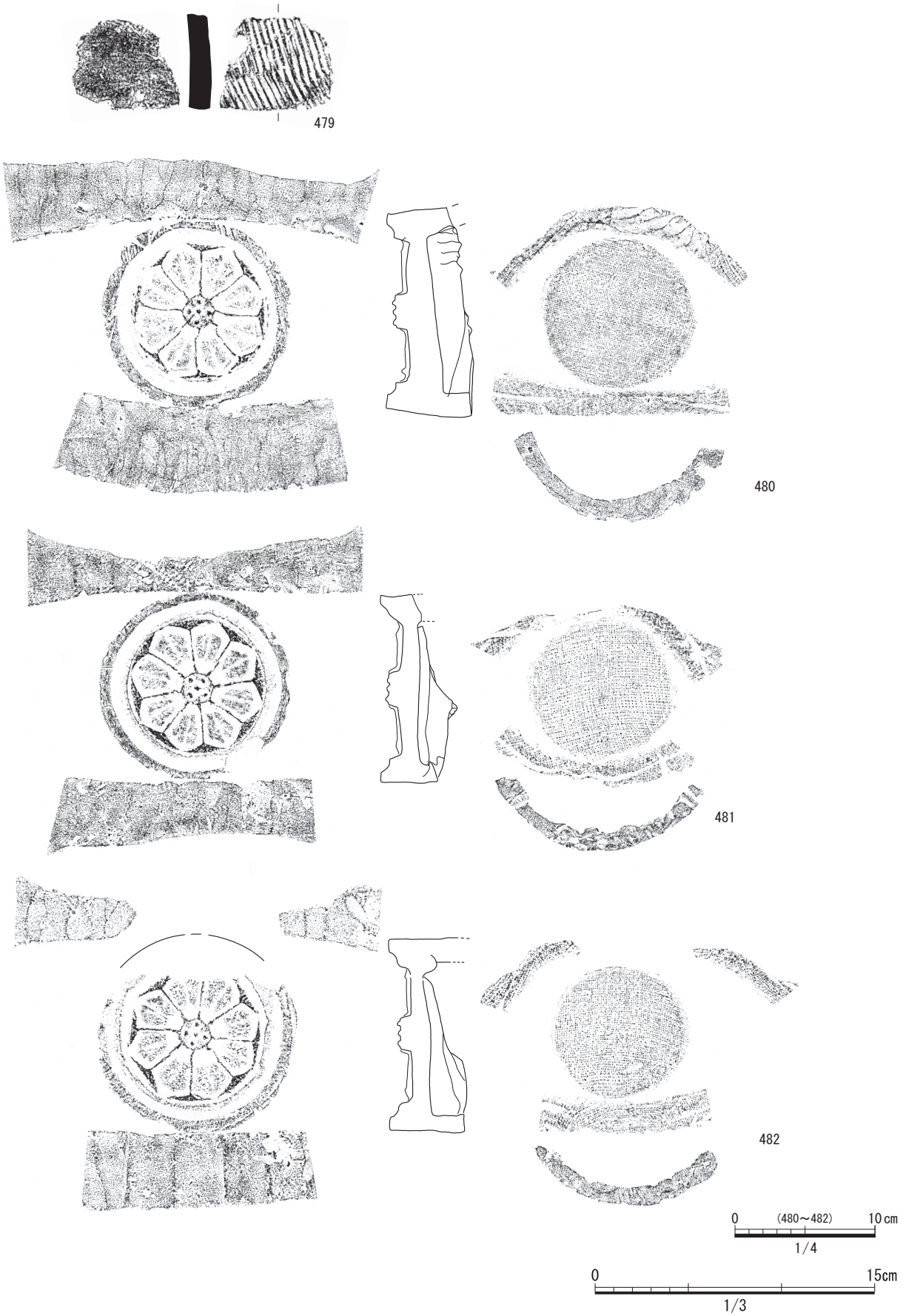
角度で立ち上がり、体部下半に丸みを帯びる。底部外面はヘラケズリが施され、杯 G 身とは別系統と考えられる。457 ～ 459 は口径 12 ㎝内外の製品で、底部ヘラ切り技法による杯 G 身で、体部は外傾ぎみに立ち上がる。7 世紀後半と推定される。460 は口径 16.8 ㎝の扁平なつまみをもつ蓋。天井部は丸みを有し、粗くヘラケズリされ、口縁端部で短く垂下する。8 世紀前半と推定される。461 ～ 463 は口径 12 ～ 15 ㎝台の杯 A。底部は回転ヘラケズリが施される。垂直ぎみに立ち上がる 461 と外傾ぎみに立ち上がる 462 がある。464・465 は高台を有する杯 B。464 は口径 13.2 ㎝、465 は 10.8 ㎝を測る。体部は外傾ぎみに立ち上がり、高台はあまり高くなく、若干外方へふんばる。高台内は 464 が回転ヘラケズリ、465 が回転糸切り痕を残す。形態的に類似し法量分化が認められることから 8 世紀中頃までのものと推定される。466 は身の深い杯で、法量比が大きい。467 は盤形の器種。底部外面はともにヘラケズリが施される。468 ～ 470 は高杯。468 は丸底の杯部が取り付き、脚部に長方形の透かしを有する長脚高杯、469・470 は脚部が八の字状に開く短脚高杯。468 は 6 世紀後半台まで遡る可能性があり、469・470 は 8 世紀代と推定される。471 の甕は口縁から頸部にかけての破片で、頸部が短い胴張形態と推測され、口縁端部に縁帯がめぐる。頸部形態から 8 世紀中頃までのものと推定される。472 は口径 13.2 ㎝の灰釉陶器椀。内外面に施釉は認められず、高台内に回転ヘラケズリ痕が残り、高台は爪形を呈する。黒笹 90 号窯式に比定できよう。473 は全体に錆釉がかかる近世陶器。把手が剥がれ、肩部に有孔が 1 ヶ所認められる。474 は現代遺物。475・476 は丸瓦。475 は広端部の破片で、凸面は横方向のヘラケズリ、凹面は横方向のナデが加えられ、布目痕や模骨痕などは確認できない。476 は凸面のケズリ調整によってタタキ痕跡は確認できないが、凹面には布目痕と側板連結模骨痕が残る。477 は平瓦。凹面に布目痕と側板連結模骨痕が残り、凸面には丁寧なケズリが施される。478 は鴟尾。連珠文が 2 重のコンパス施文で表した縦帯部分の破片と推定される。鰭部と胴部の境に 2 本 1 単位の沈線間に連珠文により区画される。鴟尾は信包中原田窯跡の灰原出土資料と類似している。

これらの資料は、多時期にわたっており、時代的には 6 世紀後半から 7 世紀、8 世紀代までの須恵器類、9 世紀後半の灰釉陶器などであるが、数量的には 8 世紀前半から中頃までの資料が多い。従来から羽根坂古窯跡とされてきた推定地でもあるが、窯跡の確認までには至っていない。生産遺跡の可能性もあるが、これら遺物の出土地点も不明であるため現状では可能性の指摘に留めておきたい。

45　寿楽寺廃寺跡（遺跡番号 21217-09275）

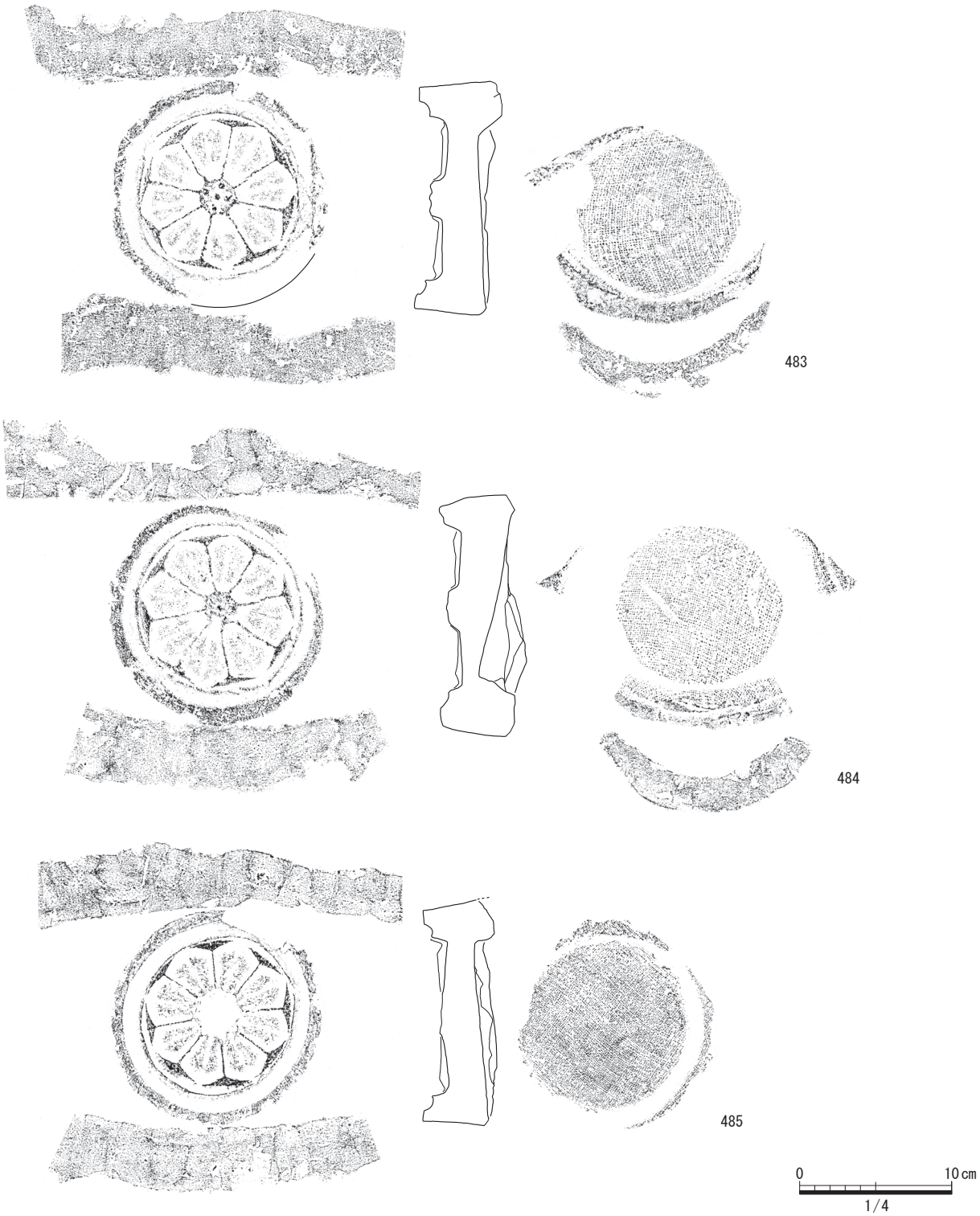
古川町太江字左近に所在し、宮川の支流太江川右岸の段丘端部に位置する。眼下には、古川国府盆地から神岡町を抜けて越中に通じる街道が通る。寿楽寺廃寺跡は太江遺跡に含まれる。太江遺跡は古墳時代から古代の集落遺跡であり、中世遺物の散布も認められる。

1998 ～ 2000・2003（平成 10 ～ 12・15）年度の 4 次にわたり、寿楽寺廃寺跡とそれを含む古代集落遺跡の太江遺跡で発掘調査が実施された（㈶岐阜県文化財保護センター 2002・㈶岐阜県教育文化財団 2005）。遺構では、講堂基壇跡とそれに取り付く回廊跡を確認した。回廊跡に西接して礎石建物跡、さらに西に 200m、東に 100m にわたり竪穴建物跡群を確認している。講堂や回廊は伽藍寺院中枢域、礎石建物跡は僧坊で寺院周辺域、竪穴建物跡群は居住域で周辺集落と位置づけられている。なお、伽藍中枢部は現寿楽寺本堂付近と考えられた。遺物より、7 世紀第 3 四半期頃に伽藍が整備され、10 世紀代に衰退したと考えられている。遺物では、古墳時代から古代の遺物が多く出土した。返りを持つ蓋や高台の無い須恵器杯が一定量、返りを持たない須恵器蓋や高台の無い須恵器椀が最多、その後



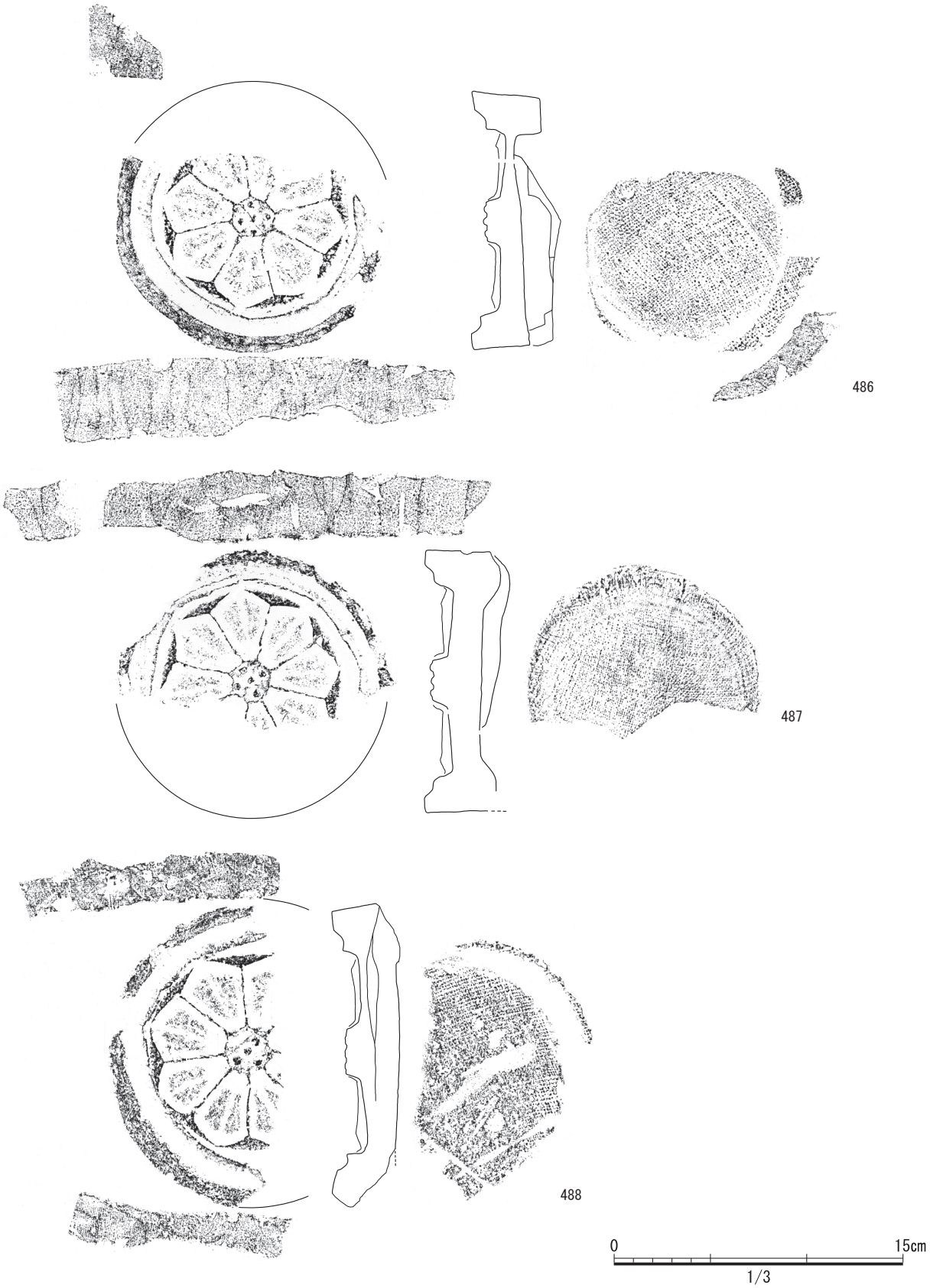
第 42 図　寿楽寺廃寺跡遺物実測図 (1)

の年代を示す三日月高台を持つ灰釉陶器椀が少量出土している。三足火舎、硯、鴟尾、瓦類、塑像などに加え、「寺」と刻書があるものや、郷名の「高家寺」と墨書がある須恵器など寺院と深くかかわる遺物も出土した。また、三彩陶器、暗文土器など畿内との関連を窺わせるものもある。瓦は軒丸瓦で７型式を確認している。有段縁単弁八弁蓮華文軒丸瓦（Ⅰ型式）や二重圏縁単弁八弁蓮華文軒丸瓦（Ⅱ型式）、四重圏縁単弁六葉忍冬蓮華文軒丸瓦（Ⅴ型式）など、瓦当文様に飛鳥時代の特徴を示すものがある。これらは、多くの瓦研究者により取り上げられ、Ⅴ型式の忍冬蓮華文軒丸瓦は大阪府野中



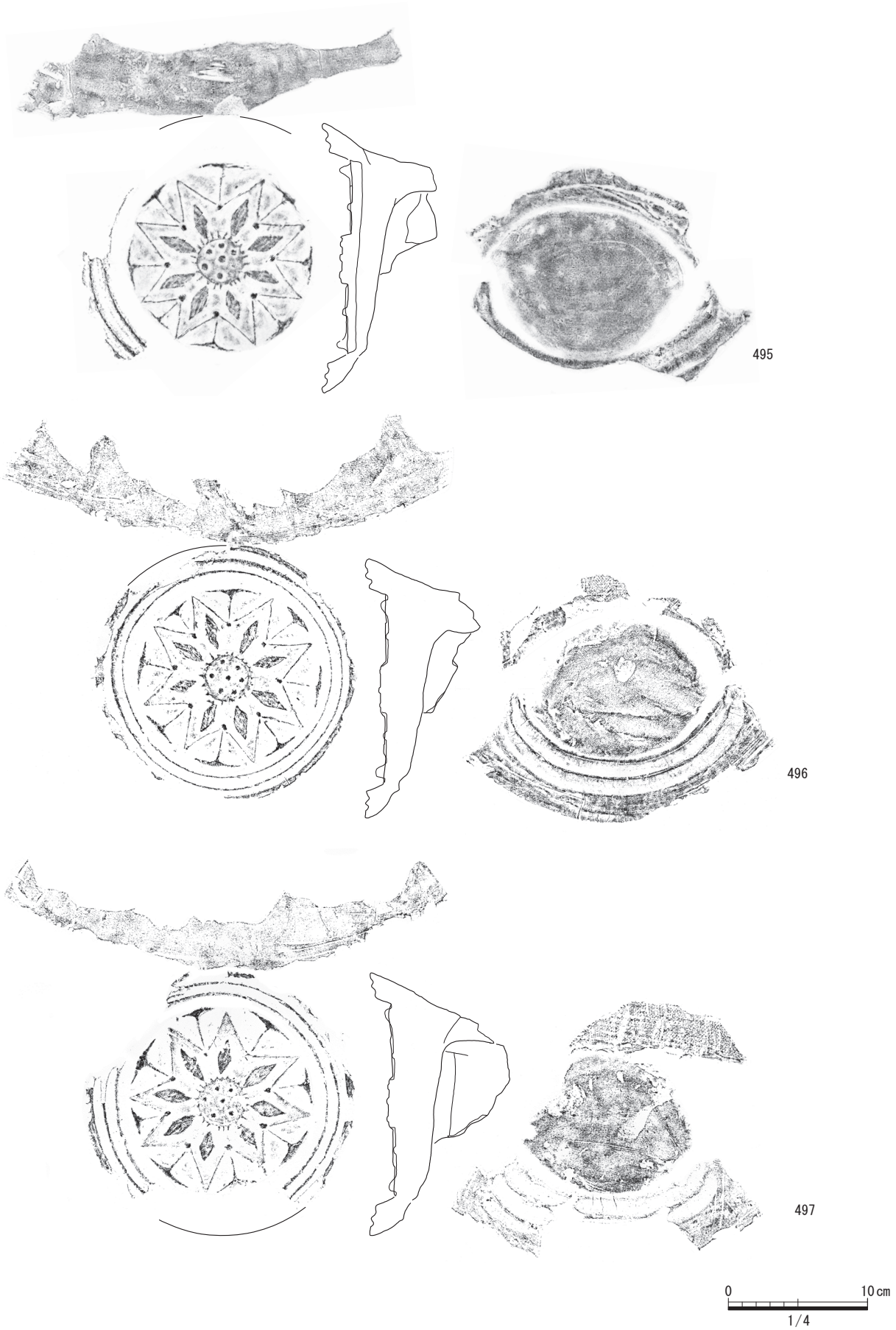
第 43 図　寿楽寺廃寺跡遺物実測図 (2)

寺跡 - 愛知県尾張元興寺跡、Ⅰ・Ⅱ型式の素弁蓮華文軒丸瓦は滋賀県衣川廃寺跡 - 長野県明科廃寺跡 - 山梨県天狗沢瓦窯跡との関連が述べられ、全国的に知られる遺跡となった（稲垣 1971、八賀 2001、山路 2013、三好 2018a・2018c）。



第 44 図　寿楽寺廃寺跡遺物実測図 (3)

第 45 図　寿楽寺廃寺跡遺物実測図 (4)

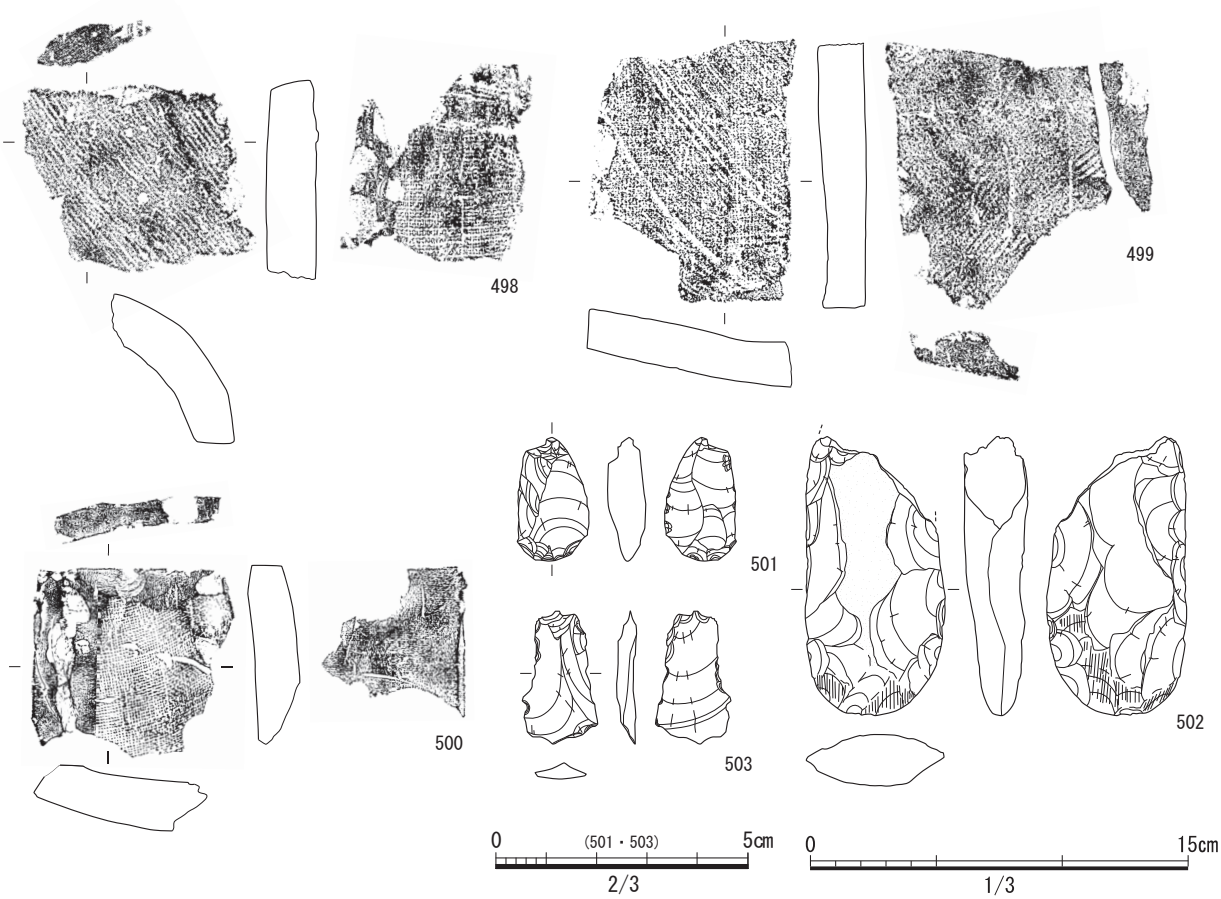


第46図　寿楽寺廃寺跡遺物実測図（5）

また、2018（平成 30）年度より岐阜県と飛騨市で協力して内容確認調査を開始した。微地形測量図を重ねることにより古代寺院の伽藍中枢部の様相が想定された。さらに、地籍図調査や微地形表現図により中世寺院としての周辺の広がりも想定できた。その歴史の上に、再興された近世以降、寿楽寺が法灯を守り続けていることが明らかとなった（三好 2018b）。

踏査では、寿楽寺境内地と周辺から多くの遺物の散布が認められた。また、これまで見つかった瓦類が寿楽寺に保管されており、借用を受けることができた。今回は、須恵器１点（479）、軒丸瓦 18 点（480 ～ 497）、丸瓦１点（498）、平瓦２点（499・500）、石器・石製品３点（501 ～ 503）を図示した。軒丸瓦は『太江遺跡・寿楽寺廃寺跡』の分類に従って記述する（㈶岐阜県文化財保護センター 2002）。

479 は甕の破片である。480 ～ 494 は、有段素文縁単弁八弁蓮華文軒丸瓦であり、Ⅰ型式である。八角形の中房に１＋４の蓮子を持つ。凹弁を区画する凸線は、弁端近くで扇形に広がる。外区は内側に凹みを巡らし、外側は平らである。丸瓦部凸面には縦方向のヘラケズリを施す。瓦当裏面から丸瓦部凹面にかけて連続する布目が認められる。丸瓦部凹面の瓦当付近には一条のすき間が認められ、瓦当裏面下半部に２㎝あまり高まりが残る。また、丸瓦部凹面には側板連結模骨痕を確認できないため、杵状の造瓦器具を用いた縦置型一本作り軒丸瓦である（三好 2018a）。480・486・487・489 は中房に笵傷が認められる。沢廃寺跡の資料も同じ位置に笵傷があり、同笵と考えられる。495 ～ 497 は三重圏線文縁単弁八弁蓮華文軒丸瓦であり、Ⅵ型式である。Ⅵ型式は、三重圏線文縁単弁八弁蓮華文軒丸である。内区は、1+6 の蓮子を持つ中房と、図案化された８弁の蓮弁からなる。中房の周囲には 24 か所のキザミを施す。蓮弁は、８つの山形で表現され、それぞれの接点には珠文を施し、菱形の子弁



第 47 図　寿楽寺廃寺跡遺物実測図（6）

を持つ。弁間には、T 字楔形の間弁を配する。外区は三重圏線文である。丸瓦部凸面は、横方向のナデオサエを施し、瓦当端縁から接合部にかけて粘土を貼りつける。瓦当裏面から丸瓦部凹面にかけては、粘土を貼りつけた後、ナデオサエを施す。瓦当裏面下半部は強いナデにより段を有する。丸瓦部凹面には、布目圧痕を確認できる。瓦当内区の蓮弁と間弁以外に赤彩を施す。498 は丸瓦の狭端縁破片であり、凸面に縄タタキが遺存する。499 は平瓦の広端縁破片であり、凹面に糸切り痕と側板連結模骨痕が残り、凸面に平行タタキが遺存する。500 は平瓦の狭端縁破片であり、凹面に布目圧痕、凸面にケズリが認められる。凹面の狭端側は面取りされる。

501 は上下端に剥離が残る楔形石器である。502 は打製石斧であり、土づれ痕が顕著である。503 は両側面に刃毀れが認められ、ＵＦに分類した。

既往調査から、古代の寺社跡と考えられる。

46　城見寺城跡（遺跡番号 21217-21742）

古川町信包字城見寺に所在し、山頂の平坦地に立地する。

名称から寺と考えられてきた。一方、堀切や虎口の存在から中世城館の様相が強く、廃城後に寺院建立を想定している（岐阜県教委 2005）。

遺跡は、白川郷方面から古川盆地へ抜ける街道を見下ろし、信包集落を越えて向小島城跡と相対し、立地上重要な山城であったものと推測される。

47　杉崎北野遺跡（遺跡番号 21217-11771）

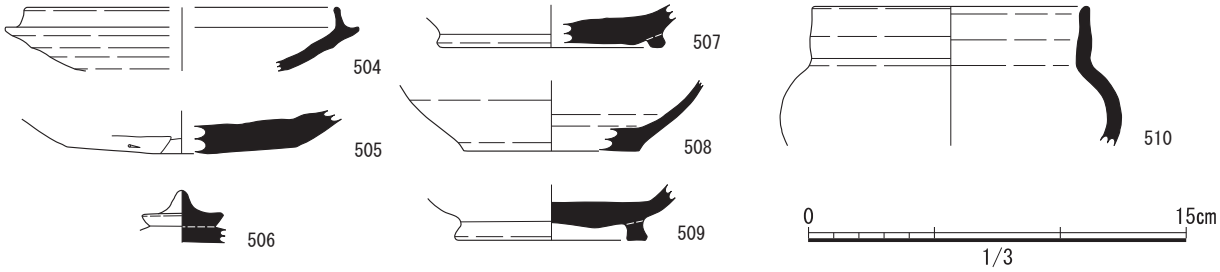
古川町杉崎字北野に所在し、河岸段丘と山麓の間の狭小な平坦地に立地する。

踏査では、遺物が集中して散布する状況を確認した。

遺物では、須恵器古墳時代器種 8 点、古代器種 243 点、灰釉陶器 8 点、瀬戸美濃焼 2 点、近世陶磁器 2 点、時期不明陶磁器 4 点、スクレイパー 1 点、剥片 1 点、合計 269 点を採集した。

今回は、須恵器 7 点（504 ～ 510）を図示した。504 は杯 H 身である。504 は口縁部がほぼ直立し、端部を丸く仕上げる。7 世紀前半～中頃のものと推定される。505 は回転ヘラ切りの底部破片であり、杯 G 身である。506 は蓋の摘みと推定される。507 は杯 B であり、8 世紀前半から中頃までのものと推定される。508 は底部に回転糸切り痕が遺存する椀 A であり、体部が内湾しながら開く。509 は回転糸切り後に高台を貼付した椀 B である。510 は口縁部が短く直立する短頸壺である。

図示した古墳時代と古代の遺物のほか、スクレイパーや瀬戸美濃焼の灰釉皿も採集した。古代が主要な時期であるが、縄文時代・古代・中世の散布地と考えられる。



第 48 図　杉崎北野遺跡遺物実測図

48　杉崎狐洞 1 ～ 10 号墳（遺跡番号 11772 ～ 11781）

古川町杉崎字狐洞に所在し、宮川右岸の山腹尾根沿いに立地する。

踏査では、1 ～ 10 号墳を確認した。

1 号墳は円墳である。墳裾部で径 16.0 m、墳頂部で径 7.0 mを測る。礫が表面に多数見えている。

2 号墳は円墳である。墳裾部で径 14.0 m、墳頂部で径 6.0 mを測り、高さ 3.0 mである。

3 号墳は円墳である。墳裾部で長径 19.0 m、短径 17.0 mを測り、墳頂部で長径 10.0 m、短径 9.0 mを測る。高さは北側で 1.5 m、南側で 2.4 mである。墳頂部に窪みがある。

4 号墳は円墳である。墳裾部で径 11.0 m、墳頂部で径 6.0 mを測る。

5 号墳は円墳である。墳裾部で径 11.0 m、墳頂部で長径 9.0 m、短径 6.0 m、高さ 1.2 mを測る。

6 号墳は円墳である。墳裾部で径 12.0 m、高さ 1.8 mである。

7 ～ 10 号墳は尾根上の高まりが古墳と考えられた。

49　杉崎廃寺跡（遺跡番号 21217-00151）

古川町杉崎字あわらに所在し、宮川右岸の沖積微高地に立地する。一部が県史跡である（大野 1963・角竹 1938）。1991 ～ 1995（平成 3 ～ 7）年度に伽藍中枢部の発掘調査が実施され、2010（平成 22）年度に伽藍周辺の試掘確認調査を行った（河合 2015c・杉崎廃寺跡発掘調査団 1998・飛騨市教委 2012）。

そこでは、半島状の高まりに小規模ながら主要堂塔を備えた 7 世紀末～ 8 世紀初頭創建の寺院跡であることが判明した。主要堂塔の伽藍配置は、南面する金堂の東に搭が並び、金堂の正面に中門、後ろに講堂、北東側に鐘楼を配し、それらを一本柱塀が取り囲む。また、伽藍内部には玉石が敷かれていた。講堂の背後には僧坊域が配置される。廃絶は遺物から 8 世紀末～ 9 世紀初頭頃と推測される。

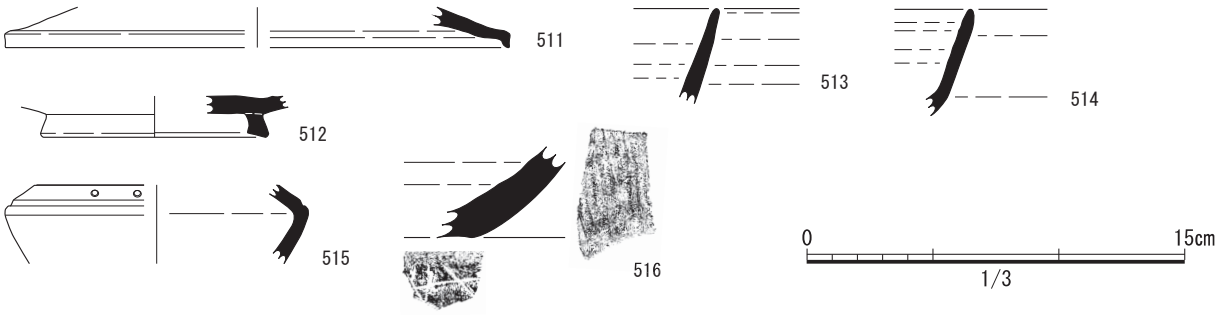
遺物は浄瓶・水瓶・火舎・鉄鉢・高盤などの供養具、丸瓦・熨斗瓦などの瓦類、杯・椀の食器類、それに建築部材の木製品などが出土した。また、調査当時は岐阜県初の出土となった木簡も発見された。「符　飽□」と読め、寺院周辺が『和名抄』に記載のある荒城郡飽見郷の比定地とされた。さらに「見寺」と書かれた墨書須恵器も発見され、古代の寺名も判明している。

現地は、遺跡公園として一般に公開されている。

50　杉崎毘沙門遺跡（遺跡番号 21217-11782）

古川町杉崎字毘沙門に所在し、宮川右岸の河岸段丘上に立地する。

踏査では、遺物が集中して散布する状況を確認した。



第 49 図　杉崎毘沙門遺跡遺物実測図

遺物では、須恵器古代器種18点、陶磁器等2点、合計20点を採集した。今回は須恵器6点（511～516）を図示した。511は蓋、512は杯Bであり、高台は中央より外側を接地点とする。513・514は口縁部が強く立ち上がり、杯と推測される。515は肩部の2本の凹線間に刺突文を施す壺か瓶である。516は甕である。

年代を推定できる遺物は512杯Bのみであるが、513や514も同時期のものであろう。須恵器以外の遺物は細片であるため、当遺跡は古代の散布地と考えられる。

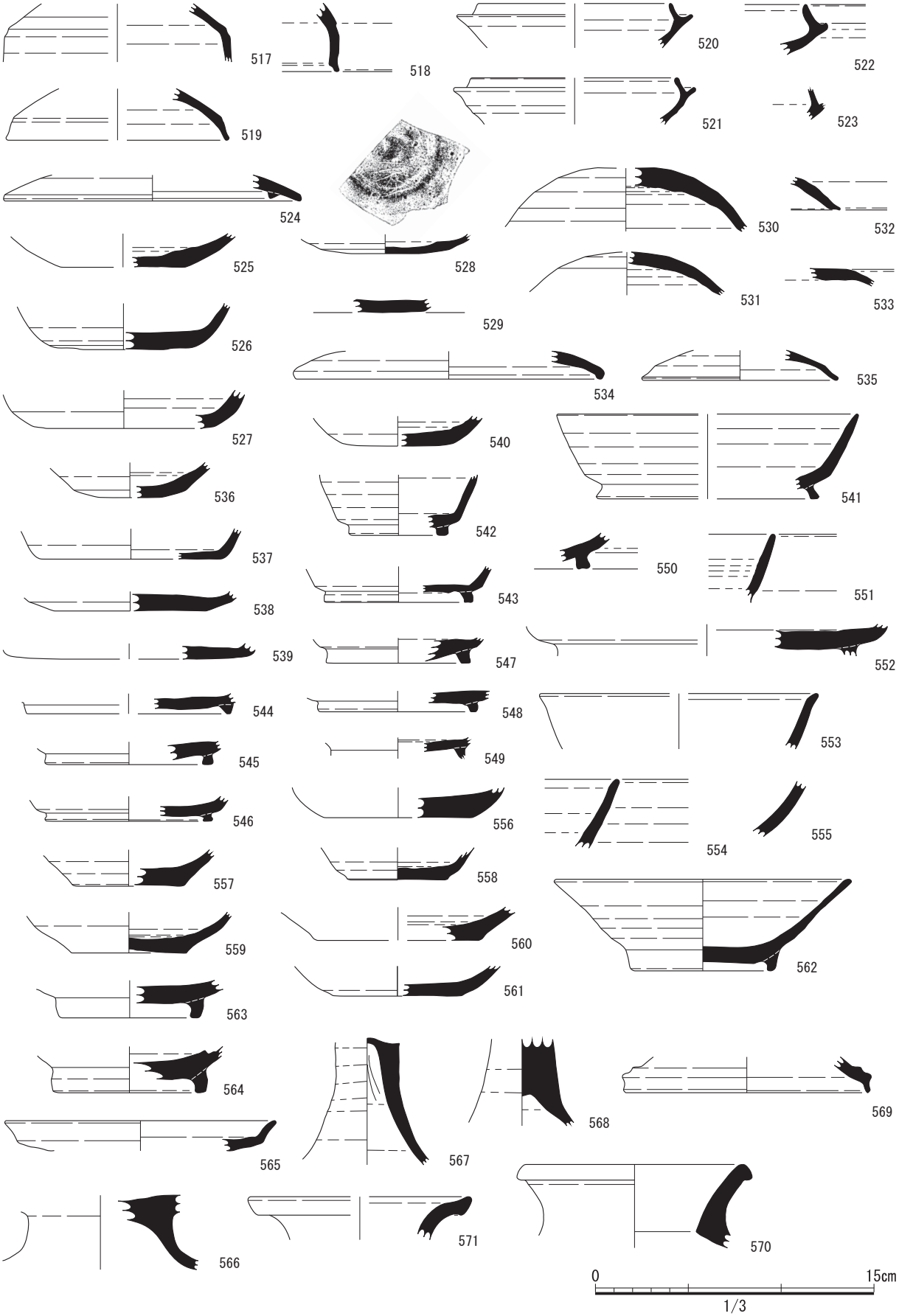
51　太江遺跡（遺跡番号21217-09274）

古川町太江字左近、字神垣内、字高田、字釜ヶ谷、字多度宮、字一貫田、字稲葉、字小林にかけて所在する。宮川の支流太江川右岸の河岸段丘から山麓にかけて立地する。

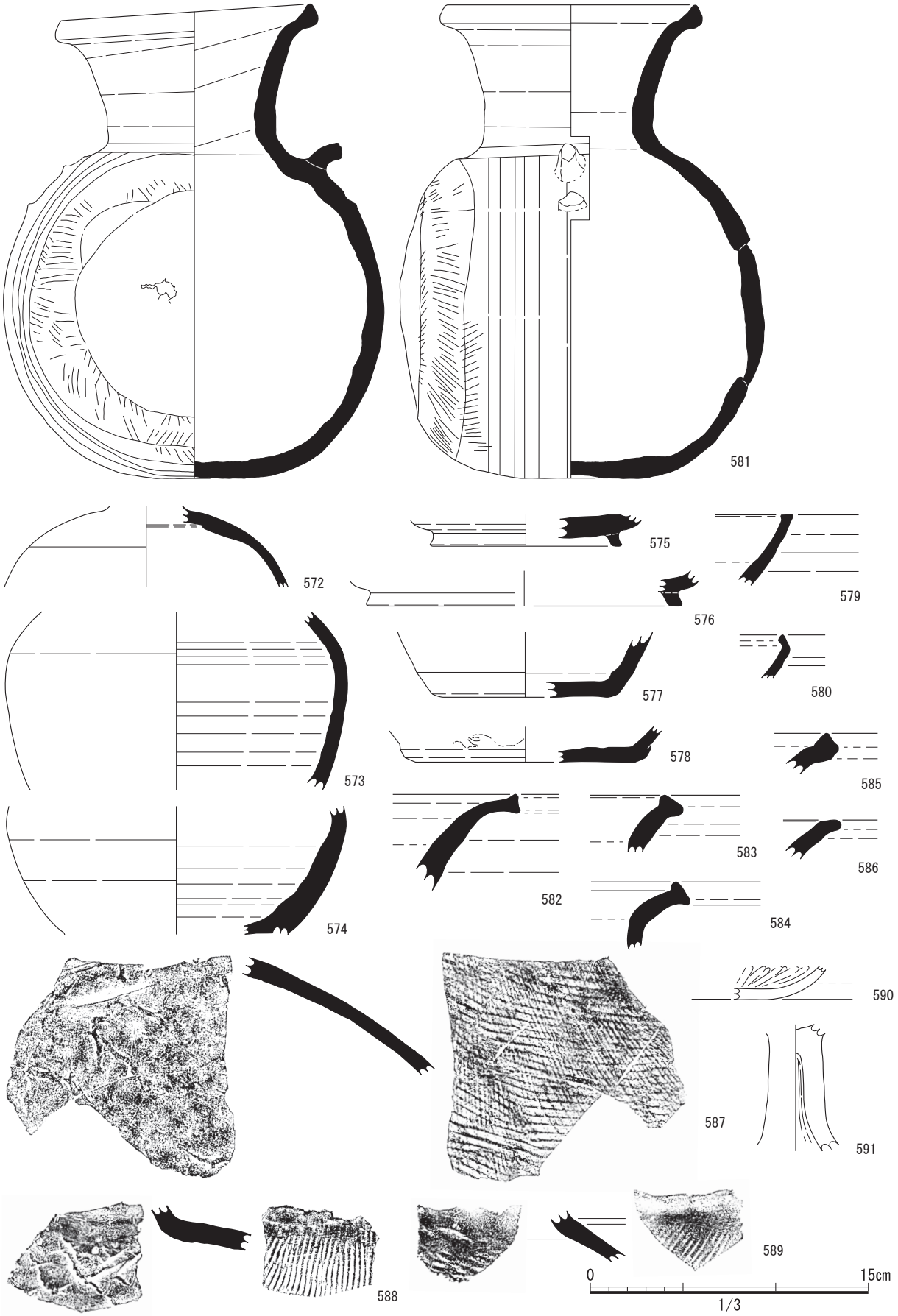
1998～2000・2003（平成10～12・15）年度の4次にわたり、県道新設に伴って太江遺跡で発掘調査が実施された（㈶岐阜県文化財保護センター2002・㈶岐阜県教育文化財団2005）。6世紀から9世紀にかけての集落跡であり、中心に寿楽寺廃寺跡が所在する状況が明らかとなった。

遺物では、須恵器古墳時代器種53点、古代器種1,351点、土師器古代器種12点、灰釉陶器64点、瀬戸美濃焼12点、珠洲焼2点、貿易陶磁2点、その他中世陶磁器等10点、近世陶磁器33点、近現代遺物5点、時期不明陶磁器32点、瓦72点、合計1,648点を採集した。今回は、須恵器60点（517～589）、土師器2点（590･591）、灰釉陶器4点（592～595）、打製石斧2点（596･597）、瓦5点（598～602）を図示した。

517～519は杯H蓋である。全て天井部と口縁部の境に明瞭な凹線を持つ。520～523は杯H身である。520・521は口縁部がやや内傾して立ち上がり、端部を丸く仕上げる。522はやや内傾した口縁部を持ち、端部が外反する。524は杯G蓋である。短い返りを持つ。525～529は杯G身である。528には見込みに「奉」と刻字される。寿楽寺廃寺の伽藍中枢域から西100ｍの地点で採集したものであり、古代寺院に関わる遺物の可能性が高い。530～535は蓋である。530・531は器高が高く、丸みを帯びた天井部を呈する。530～533は杯H蓋の可能性がある。535は壺類の蓋のような器種と判断した。536～540は杯Aである。537・539は底形が大きく器壁が薄い。541～552は杯Bである。544は高台が逆台形を呈し、545～550は方形を呈する。553は口縁端部が外反する杯である。554・555はゆるく内湾する器形の杯である。556～561は底部に回転糸切り痕が残る椀Aである。559・560は底径が大きく、体部も開き気味に立ち上がる。562は椀Bである。底部の切り離しは回転糸切りで、三日月形状に近い高台の貼付け後にナデを施す。体部の器壁はうすく、直線的に開く。9世紀後半のものと推定される。563･564は高台が内湾する椀Bの底部破片と考えられる。565は盤の口縁部破片であり、口縁部は外反する。566は高盤の短脚部破片である。同様の形状のものが杉崎廃寺跡と信包中原田古窯跡で出土している。567～569は高杯である。567・568は短脚高杯の脚部破片と推測される。569は径が大きく、外面に稜を持ち、古墳時代のものと推定される。570は壺の口縁部破片であり、口縁端部に縁帯を有する。571は口縁部が外反し、端部に縁帯を有する壺瓶類である。579は口縁部がゆるく内湾する鉢の口縁部破片である。580は口縁部が強く内湾し、端面が内傾する鉄鉢である。581は提瓶である。平らな底部から丸みを持って頸部まで立ち上り、口縁部は外反して端部に縁帯を有する。古墳時代のものである。飛騨の山樵館の収蔵資料であり、太江周辺で見つかったもののようである。582～589は甕である。582～586は口縁部、587～589は甕の頸部から肩部への破片である。590は



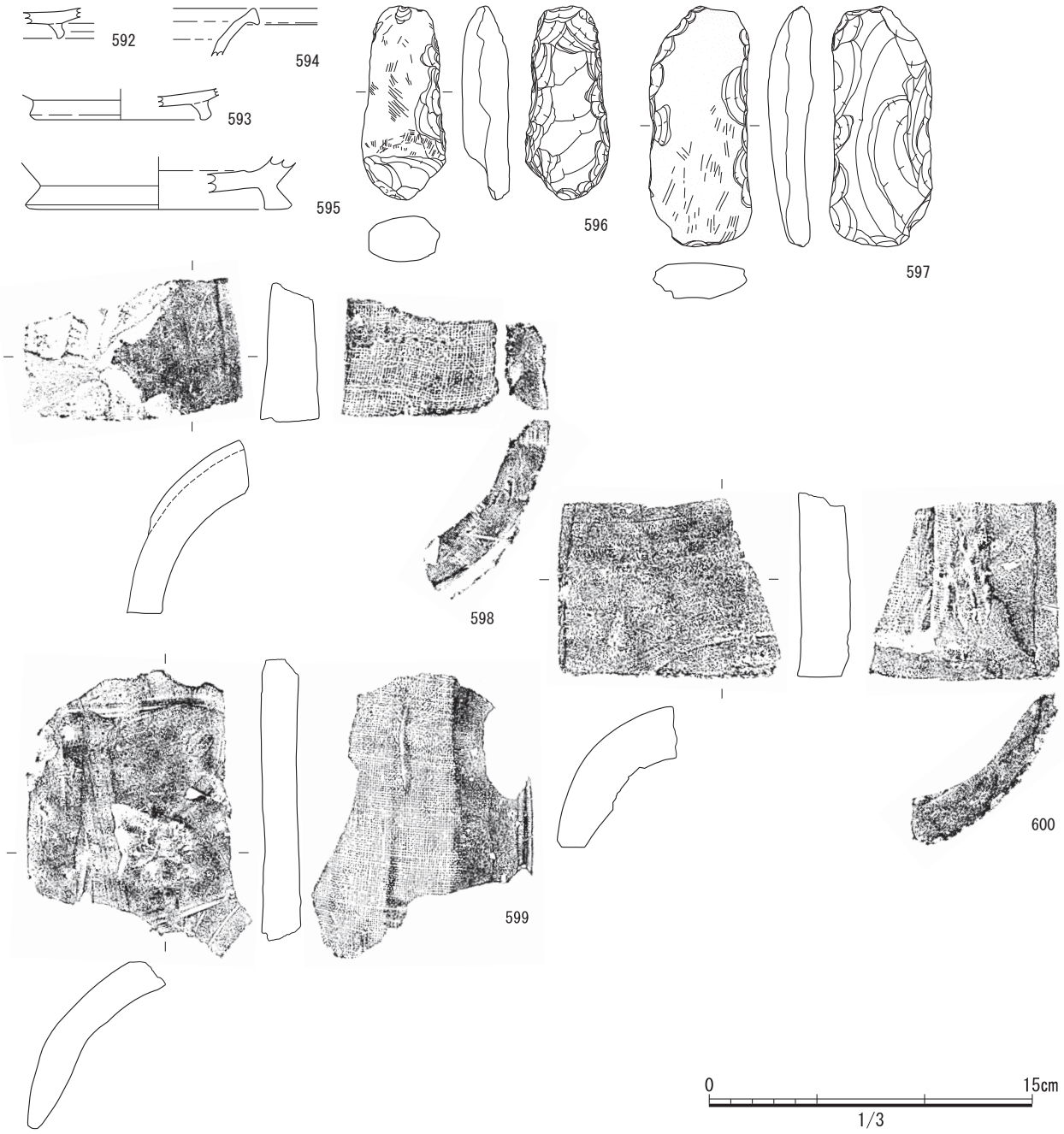
第 50 図　太江遺跡遺物実測図 (1)



第 51 図　太江遺跡遺物実測図 (2)

土師器杯である。見込みに放射状暗文を施し、古代の所産である。591 は土師器高杯の脚部破片である。592･593 は灰釉陶器の椀か皿である。三日月状の高台を貼付け、9 世紀後半のものと考えられる。594 は縁帯を有する瓶の口縁部破片で、長頸瓶と推測される。595 は高台が外傾し、長頸瓶の可能性がある。596・597 は打製石斧であり、表面に自然面を残した円礫利用のものである。598 ～ 601 は丸瓦である。598 は粘土合わせ目で剥離している。599 ～ 601 の凹面には側板連結模骨痕が残る。凸面はケズリやナデによりタタキの痕跡は認められない。602 は平瓦である。凹面に側板連結模骨痕と糸切り痕が残る。凸面はケズリによりタタキの痕跡は認められない。瓦は全て寿楽寺廃寺跡が立地する段丘崖下で採集したものである。

図示した古墳時代から古代にかけては、これまでの発掘調査で遺構も確認している。その他、細片であるが中世遺物も採集している。太江川を挟んで立地する小島城跡の関連で実施した歴史地理調査



第 52 図　太江遺跡遺物実測図 (3)

でも中世段階の広がりを追うことができそうである（三好 2018b）。このため、古墳時代・古代・中世を通じて営まれた集落遺跡と考えられる。

53　太江上番場遺跡（遺跡番号 21217-11783）

古川町太江字上番場に所在し、山麓の緩斜面に立地する。

踏査では、遺物が集中して散布する状況を確認した。

遺物では、須恵器古墳時代器種 6 点、須恵器古代器種 41 点、瀬戸美濃焼 2 点、近世陶磁器 1 点、

第 53 図　太江遺跡遺物実測図 (4)

時期不明陶磁器 5 点、合計 55 点を採集した。今回は須恵器 9 点（603 ～ 611）を図示した。

603 は大きく開く口縁部破片であり、瓶の口縁部と判断した。604 は杯 H 蓋であり、天井部と口縁部に稜がなく、7 世紀前半のものと推定される。605･606 は杯 H 身である。605 は受部の端部が肥厚し、内湾する。 607 は杯 G 蓋である。口縁部の内側に短い返りを持つ。608 は口縁部が垂下した蓋の口縁部破片である。609 は口縁端部に縁帯をめぐらす長頸壺か長頸瓶と考えられる。610 は鉢の底部破片である。底面に別粘土を貼り付ける。

55 点もの遺物が散布する一画であり、古墳時代から古代の散布地と考えられる。

53　太江上番場東遺跡（遺跡番号 21217-11784）

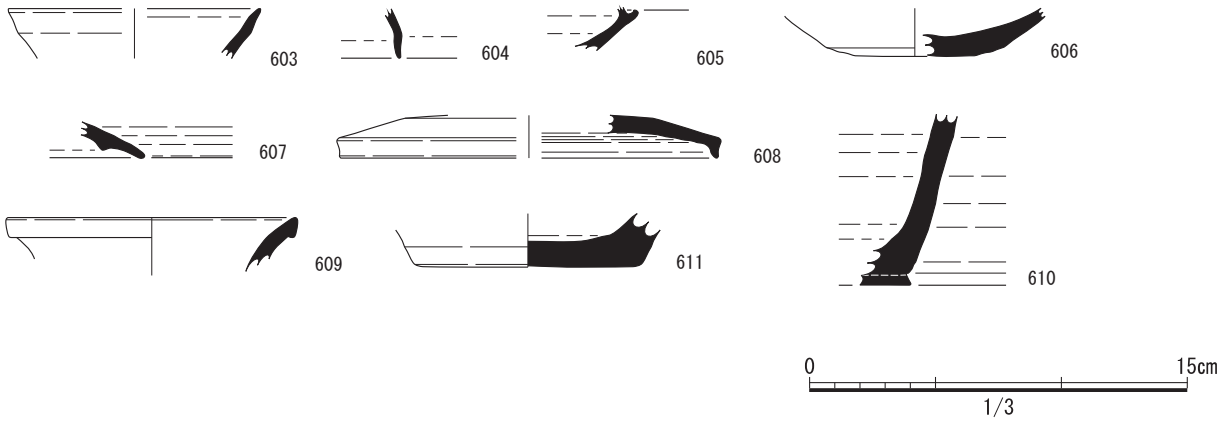
古川町太江字上番場に所在し、宮川の支流太江川右岸の山麓緩斜面に立地する。

踏査では、遺物が集中して散布する状況を確認した。

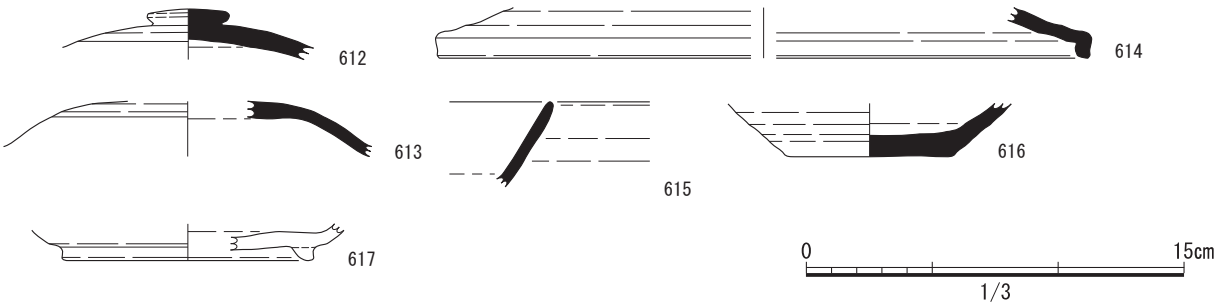
遺物では、須恵器古代器種 29 点、灰釉陶器 2 点、近世陶磁器 1 点、時期不明陶磁器 1 点、合計 33 点を採集した。今回は、須恵器 5 点（612 ～ 616）、灰釉陶器 1 点（617）を図示した。

612 ～ 614 は蓋である。612 は偏平な摘みを有する蓋であり、8 世紀前半のものと推定される。614 も口縁端部が垂下する蓋と推測される。616 は底部に回転糸切り痕が残る椀 A である。体部は直線的に開く。617 は灰釉陶器椀である。高台が逆台形を呈する。

古代の遺物が集中する一画であり、古代の散布地と考えられる。



第 54 図　太江上番場遺跡遺物実測図



第 55 図　太江上番場東遺跡遺物実測図

54　太江釜ヶ洞遺跡（遺跡番号 21217-00160）

古川町太江字釜ヶ谷に所在し、宮川の支流太江川右岸の山麓の緩斜面に立地する。

古くから古代瓦や須恵器の散布が知られており、寿楽寺廃寺跡の瓦を焼成した窯跡と考えられた（多賀 1941、長倉 1958、土田 1964）。また古鏡の出土も知られる（土田 1961a）。

踏査では、遺物が集中して散布する状況を確認した。

遺物では、須恵器古墳時代器種 11 点、須恵器古代器種 132 点、土師器古代器種 1 点、灰釉陶器 2 点、近世陶磁器 2 点、石製品 1 点、合計 149 点を採集した。今回は、須恵器 4 点（618 ～ 621）を図示した。

618 は杯 G 蓋である。返りがやや内傾し、口縁端部は丸くおさめる。620 は高台が方形を呈する杯 B の底部破片である。621 は高台の接地面が内側に強く屈曲する。太めの高台であるため壺瓶類の底部破片としたが、盤の可能性もある。

土地改良工事の際に、寿楽寺廃寺跡で出土する有段素文縁素弁八弁蓮華文軒丸瓦（Ⅰ型式）が採集されたとの聞き取りがあった。採集遺物も古代が中心であり、古代の散布地と考えられる。

55　太江小林遺跡（遺跡番号 21217-11785）

古川町太江字小林に所在し、宮川の支流太江川右岸の河岸段丘に立地する。太江遺跡の段丘崖下に位置する。

遺物では、須恵器古代器種 2 点、須恵器古代器種 58 点、灰釉陶器 2 点、瀬戸美濃焼 3 点、近世陶磁器 6 点、瓦 1 点、剥片 1 点、合計 73 点を採集した。今回は、須恵器 7 点（622 ～ 628）、灰釉陶器 1 点（629）を図示した。

622 は杯 H 身の体部破片である。口縁部と受部が欠損する。623 ～ 626 は蓋である。623 は摘み部分、624 ～ 626 は口縁部である。627 は高台が丸みを持ち、高台内に回転ヘラケズリが残る杯 B の底部破片である。628 も杯の底部破片としたが椀の可能性もある。629 は灰釉陶器皿の口縁部破片である。端部が強く外反する。

古代を中心に 73 点もの遺物を採集した一画であり、古代の散布地と考えられる。

第 56 図　太江釜ヶ洞遺跡遺物実測図

第 57 図　太江小林遺跡遺物実測図

56　太江多度 1 ～ 9 号古墳（遺跡番号 21217-00155 ～ 00157・06481 ～ 06485・11814）

古川町太江字多度に所在する。太江川を見下ろす山腹に立地する。

踏査では、1 ～ 9 号墳を確認した。

1 号墳は円墳である。墳頂部で長径 3.5 m、短径 3.0 mを測る。

2 号墳は円墳である。径 6.0 m、高さ 3.0 mを測る。遺物の散布が認められた。

3 号墳は円墳である。径 5.0 mの高まりで、片側は崩れている。

4 号墳は円墳である。墳裾部で径 10.0 mを測る。開口しており、入口は崩落している。玄室まで入り口より 1.5 mである。玄室の奥行きは計測できなかったが 3.0 m以上ある。天井石は確認できない。

5 号墳は円墳である。径 5.0 mを測る。小島稲荷神社参道で削られている。

6 号墳は円墳である。墳裾部で長径 8.7 m、短径 7.7 mを測る。

7 号墳は墳丘がない状況である。石積みを確認した。

8 号墳も墳形が不明である。石列の内側に木製建物があり、上部が削平されている。

9 号墳は円墳である。墳裾部で径 9.0 mを測る。南東部に窪みがある。

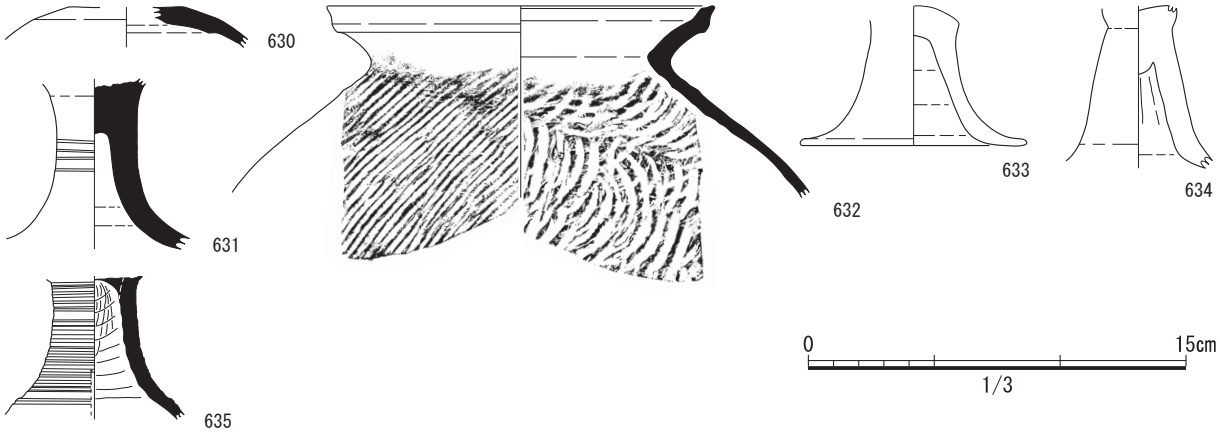
遺物では、2 号墳の地点で須恵器 7 点、土師器 2 点、合計 9 点を採集した。また、飛騨の山樵館に 5 号墳と札が付いた須恵器高杯が収蔵されている。今回は、須恵器 4 点（630 ～ 632・635）、土師器 2 点（633・634）を図示した。

630 ～ 632 は 2 号墳で採集したものである。630 は天井部にヘラケズリを施し、杯 H 蓋と推測される。631 は高杯脚部であり、外面に 3 条の凹線を施す。杯部とは接合面で剥離している。632 は口縁端部に縁帯をめぐらせる甕である。633・634 は土師器高杯の脚部である。摩滅により内外面の調整は不明である。634 の内面には絞り込みがみられる。635 は 5 号墳出土とされる須恵器高杯である。脚部破片であり、内面にロクロナデ、外面に 2 条の凹線とカキメを施す。長方形の透かしを有する。杯部とは接合面で剥離している。

57　太江中ヶ野 1 ～ 6 号古墳（遺跡番号 21217-00161 ～ 00163・06486・11815・11816）

古川町太江字中ヶ野に所在する。宮川支流の太江川左岸を見下ろす山腹に立地する。

古くから 3 基の古墳の存在が知られる（多賀 1941）。踏査では、1 ～ 6 号墳を確認した。



第 58 図　太江多度古墳群遺物実測図

１号墳は円墳である。墳裾部で径 7.0 ｍ、墳頂部で径 4.0 ｍを測り、高さ 1.5 ｍである。頂上部が崩された跡があり、残存状況は悪い。

２号墳は円墳である。墳裾部で長径 10.0 ｍ、短径 5.0 ｍを測り、高さが 1.4 ｍである。

３号墳は円墳である。墳裾部で径 14.0 ｍ、墳頂部で径 7.0 ｍを測り、高さ 2.0 ｍである。

４号墳は円墳である。墳裾部で長径 8.8 ｍ、短径 8.2 ｍ、墳頂部で長径 5.3 ｍ、短径 5.0 ｍを測り、高さ 1.6 ｍである。西方向が開口部なのか、0.9 ｍほど崩れる。0.3 ～ 0.5 ｍの河原石が周辺に散乱する。

５号墳は円墳である。墳裾部で長径 11.0 ｍ、短径 9.4 ｍを測り、高さ 3.5 ｍである。

６号墳は円墳である。墳裾部で長径 6.8 ｍ、短径 5.8 ｍを測り、高さ 1.7 ｍである。

58　太江中日影古墳（遺跡番号 21217-06503）

古川町太江字中日影に所在する。宮川支流の太江川左岸の山麓に立地する。

調査カードでは「ヨロイが出土し、再び埋葬したとの話あり」との記録が残るが、今回は「ヨロイは出土しなかった」との聞き取りがあった。

踏査では墳丘も残っておらず、位置の特定が難しい状況であった。

59　太江灰古墳（遺跡番号 21217-06504）

古川町太江字灰庄ヶに所在する。宮川支流の太江川右岸の緩斜面に立地する。

古くから古墳の存在が知られた（多賀 1941）が、調査カードでは土地改良により滅失したと記録される。墳丘も残っておらず、踏査では位置の特定が難しい状況であった。

60　太江福蔵１・２号古墳（遺跡番号 21217-06505・06506）

古川町太江字福蔵に所在する。宮川支流の太江川右岸の山麓裾に立地する。

古くから、縄文土器や石冠とともに、勾玉や管玉の出土が知られていた（大野 1914、飛騨考古土俗学会 1935、多賀 1941 など）。調査カードには、配水池が造られ、土地改良により滅失と記録される。聞き取りでは、配水池の東側にもう一つ塚があったとのことである。

61　太江洞口遺跡（遺跡番号 21217-11786）

古川町太江字洞口に所在する。宮川支流の太江川右岸の山麓裾部に立地する。

踏査では、須恵器 19 点、灰釉陶器 2 点、土師器 3 点、石器・石製品 3 点、陶器 6 点、合計 33 点を採集した。今回は細片ばかりで図化できるものは無かった。

遺物から、古代の散布地と考えられる。

62　太江前平１～３号古墳（遺跡番号 21217-00158・00159・11827）

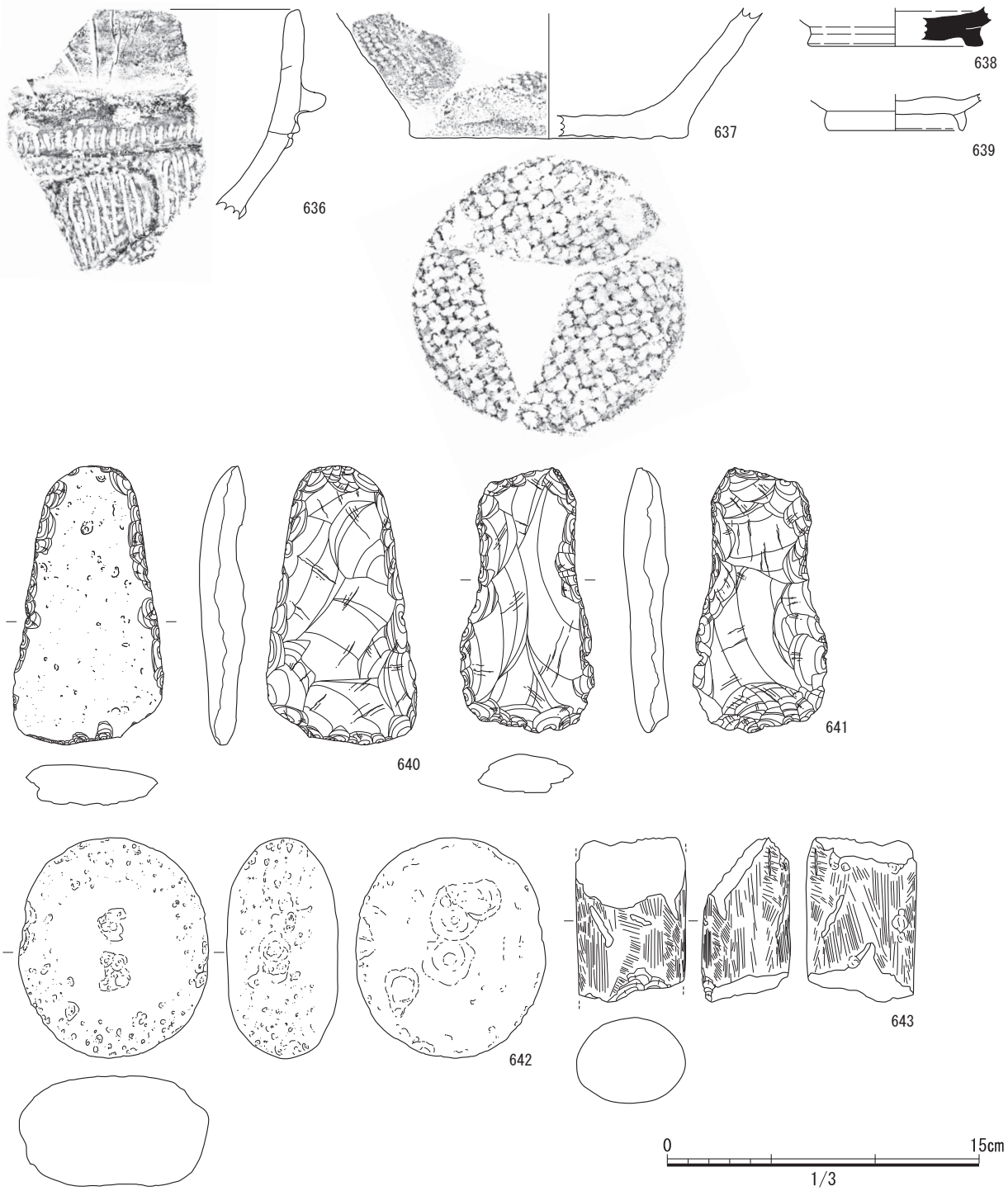
古川町太江字前平に所在する。宮川支流の太江川右岸の山麓裾に立地する。

踏査では、１～３号墳の３基を確認した。もう１ヶ所高まりはあったが、自然の丘と区別しにくいため遺跡登録はしなかった。

１号墳は円墳である。墳裾部で長径 11.0 ｍ、短径 10.0 ｍ、墳頂部で径 7.0 ｍを測り、高さ 2.2 ｍである。調査カードには南側は段を有すると記録される。

２号墳は円墳である。墳裾部で長径 9.4 m、短径 7.8 mを測り、墳頂部で長径 5.0 m、短径 4.7 m、高さ 1.0 mである。

３号墳は円墳である。墳裾部で長径 18.0 m、短径 15.4 m、墳頂部で長径 7.3 m、短径 7.0 mを測り、高さ 2.5 mである。



第 59 図　高野光専寺遺跡遺物実測図 (1)

63　高田神社裏古墳（遺跡番号 21217-06507）

古川町太江字神垣内に所在し、宮川支流の太江川右岸の山麓裾部に立地する。

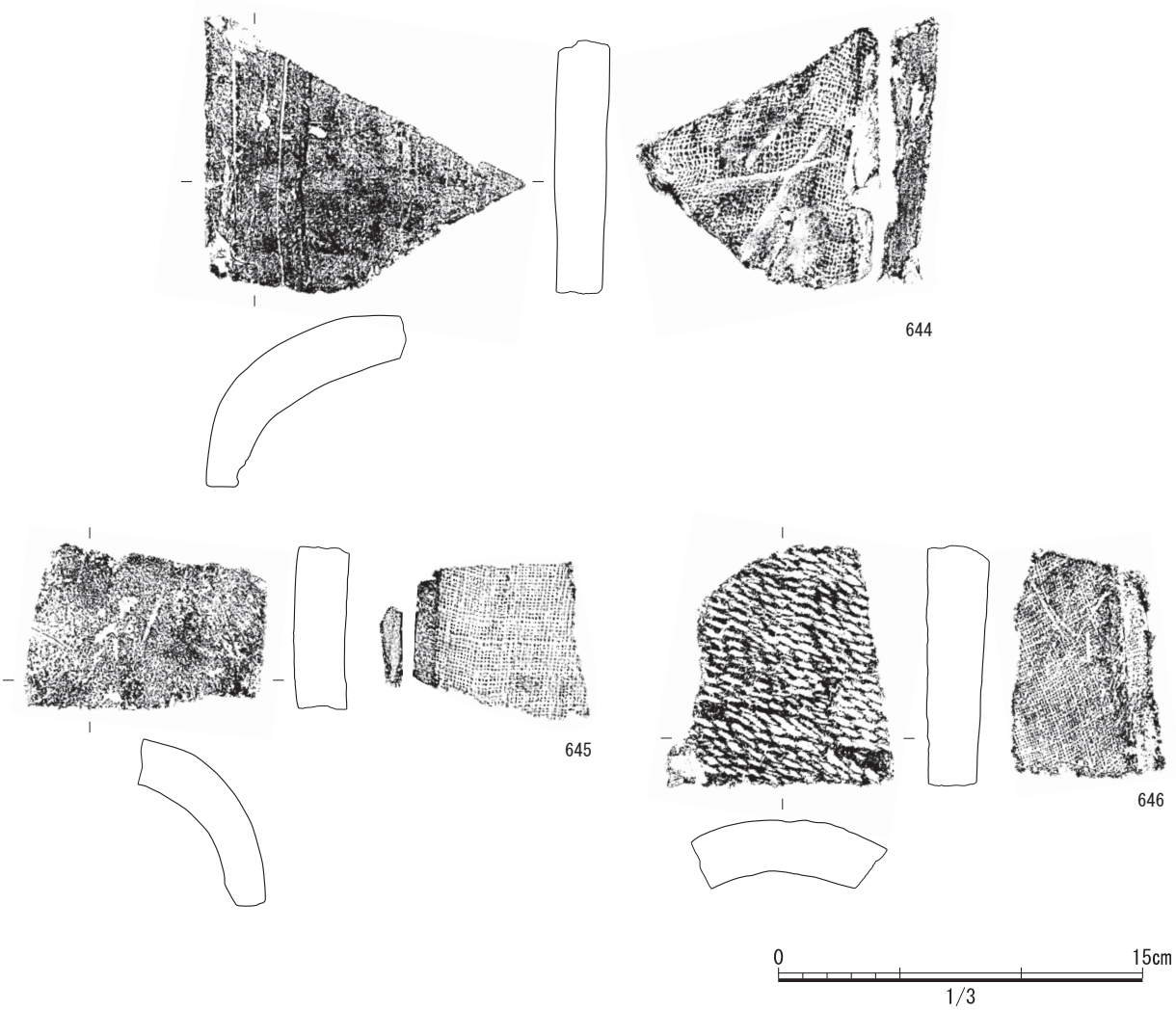
古くから、高田神社のすぐ裏に 2 基の古墳の所在が知られていた（多賀 1941）。現在は墳丘がなく、位置の特定は難しい状況である。

64　高野光専寺遺跡（遺跡番号なし）

古川町高野字光専寺に所在し、宮川左岸の丘陵端部に立地する。

現在は土地改良工事が終わっているため、踏査では遺物の確認はなかったが、地元の方から過去に採集したという遺物の寄贈を受けた。今回は、縄文土器 2 点（636・637）、須恵器 1 点（638）、灰釉陶器 1 点（639）、石器・石製品 4 点（640 ～ 643）、瓦 3 点（644 ～ 646）を図示した。

636・637 は縄文土器である。636 は口縁部破片である。口縁下の 2 本の横位隆帯間にハシゴ状沈線を施し、胴部も隆替と沈線で施文することから、縄文時代中期後葉の串田新式期のものと推定される。637 は縄文を地文とし、2 超 2 潜 1 送の網代圧痕が遺存する底部破片である。638 は高台が方形を呈し、やや外傾する須恵器椀 B である。639 は底部に回転糸切りが残り、高台が三日月形状を呈する灰釉陶



第 60 図　高野光専寺遺跡遺物実測図 (2)

器椀であり、10 世紀前半のものと推定される。640･641 は打製石斧である。640 は表面に自然面を残す。642 は凹石であり、表裏両面に磨面を持ち、また、両面と側面の 4 面に敲痕が残る。643 は小型石棒の破片であり、縄文時代後期のものと推定される。製作時の研磨痕がよく残る。644 ～ 646 は丸瓦の破片である。凸面は 644・645 にはヘラケズリが施され、646 には縄タタキ痕が残る。凹面には全て布目圧痕が残る。644・645 は側縁部破片であり、644 には凹面に紐痕跡が残り、645 には側縁に沿って面取りが施される。古代のものと推定される。

縄文土器と石器・石製品、古代の須恵器と瓦が過去に確認されているが、正確な地点は不明とのことであった。また、土地改良により地形復元が難しい。このため、現状では遺跡登録はしないこととする。

65　高野光泉寺古墳（遺跡番号 21217-00200）

古川町高野字桑さこに所在し、宮川支流の高野谷川右岸の山麓裾部に立地する。県史跡である。

明治にはすでに開口していたようで石室の図面が残る（佐藤 1909）。また、研究にも多く取り上げられてきた（岡村 1921、多賀 1941）。1959（昭和 34）年に岐阜県史跡に指定され、学術的な位置付けがなされた（大野 1972）。それによると、径 13.0 m、入口部で高さ 3.6 mを測る。石室は付近で産出される濃飛流紋岩を用いており、両袖式横穴式石室である。南東側に開口し、全長 8.7 mである。玄室は長さ 3.8 m、奥壁の幅 2.0 m、高さ約 2.0 mを測る。奥壁は 2 段の扁平な巨石を用いる。羨道は長さ 4.0 mほどで幅は玄室とあまり変わらない。

巨石を用いる石材の使い方から、後期古墳と考えられている（河合 2015b、藤井・森島 2013）。

66　高野巾ノ上遺跡（21217-00197）

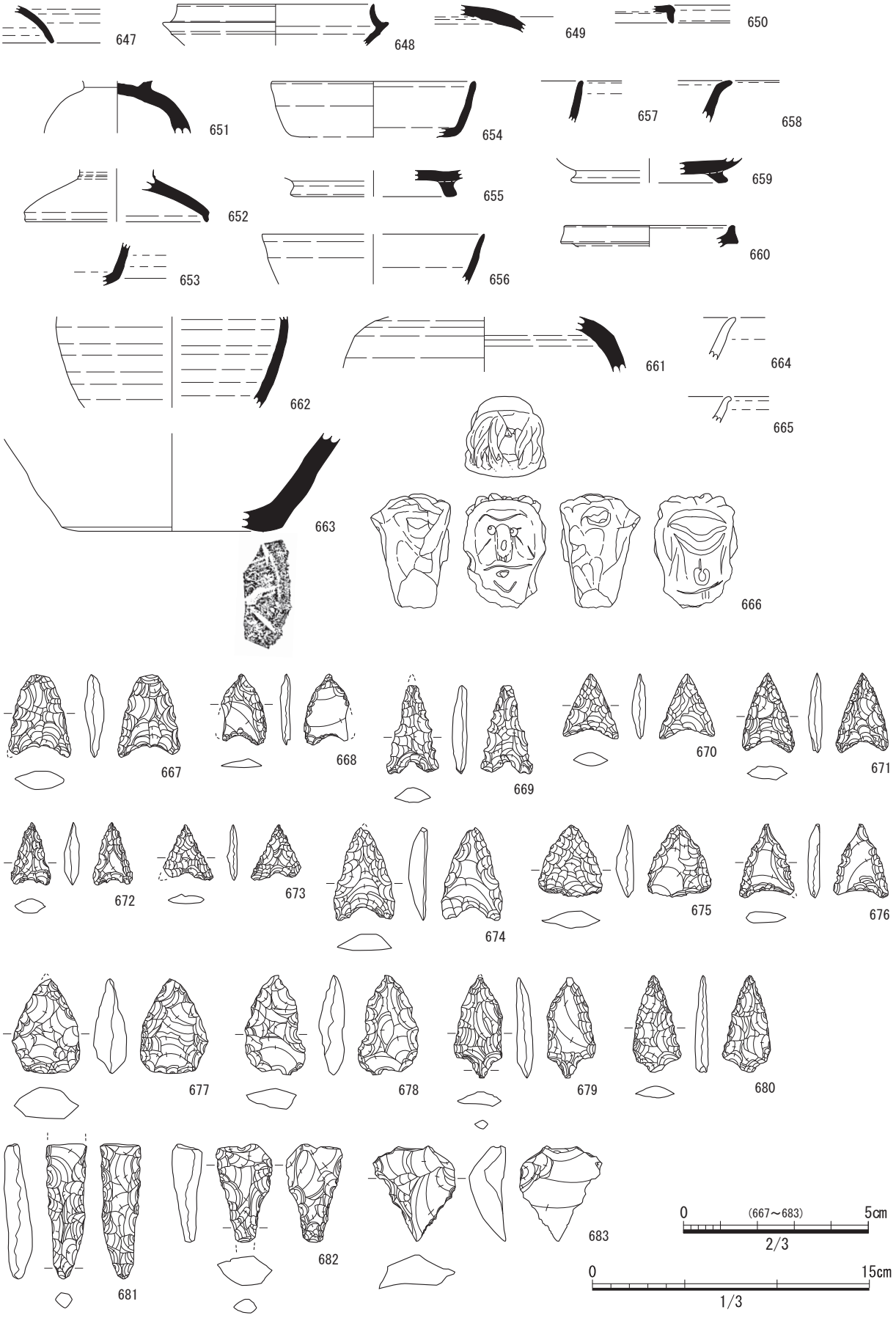
古川町高野字巾ノ上に所在し、宮川左岸の東向き河岸段丘に立地する。

明治以降、石鏃など縄文遺物の出土が知られる（富田 1915、犬塚 1939、多賀 1941）。

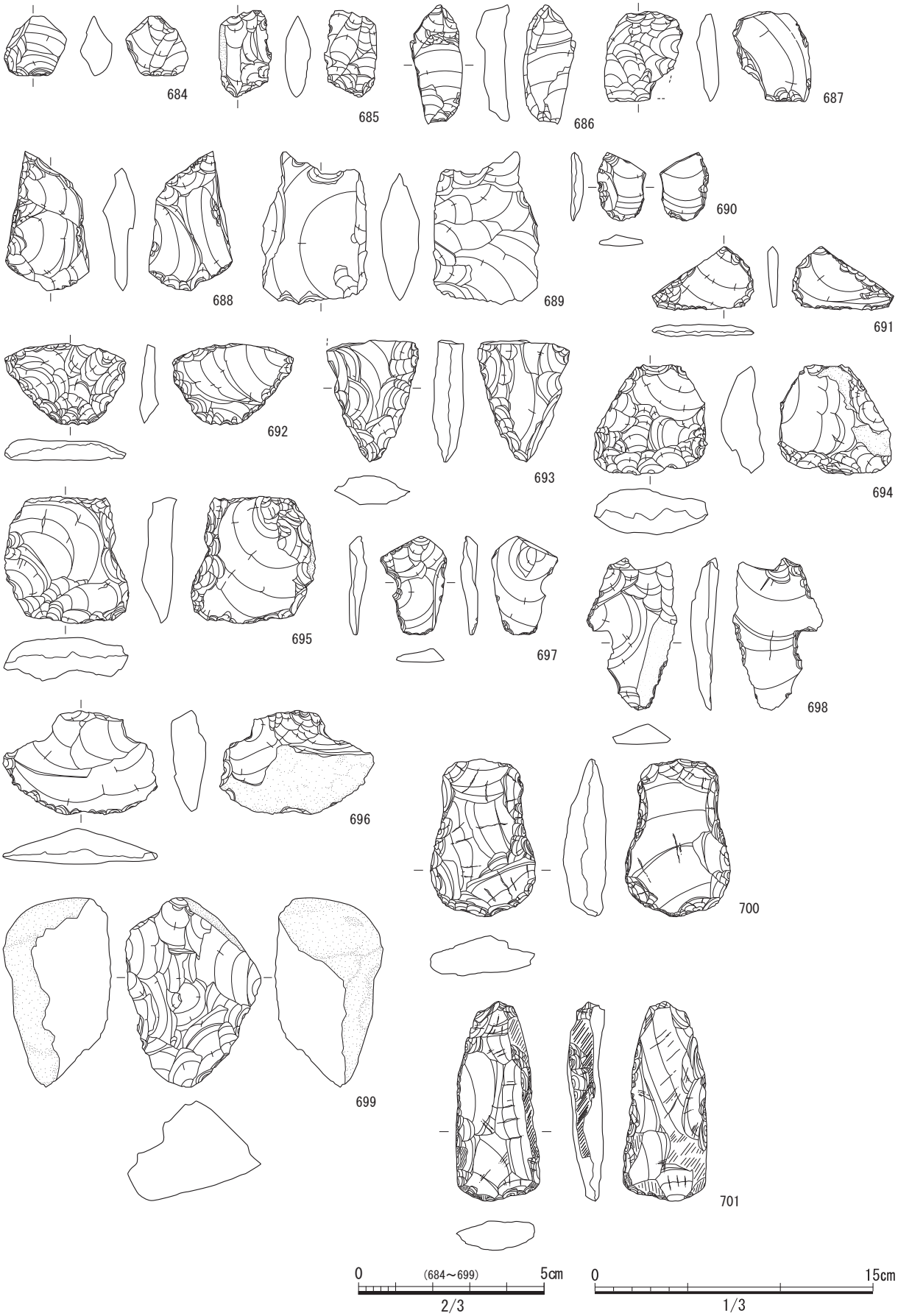
踏査では、段丘端部から山麓への緩斜面にかけて遺物散布が認められた。土地改良が終了している範囲では遺物の確認はなかった。

遺物は、縄文土器 23 点、須恵器古墳時代器種 10 点、古代器種 131 点、灰釉陶器 10 点、瀬戸美濃焼 11 点、珠洲焼 2 点、その他中世陶磁器等 2 点、近世陶磁器 29 点、年代不明陶磁器 9 点、石鏃 28 点、石錐 43 点、楔形石器 44 点、スクレイパー 180 点、その他剥片石器 143 点、剥片 402 点、石核 19 点、打製石斧 4 点、石棒類 1 点、その他石製品 4 点、合計 1,095 点を採集した。また遺物の寄贈や借用も受けた。今回は、須恵器 17 点（647 ～ 663）、灰釉陶器 2 点（664･665）、土偶 1 点（666）、石器･石製品 44 点（667 ～ 710）、金属製品 1 点（711）、ガラス製品 4 点（712 ～ 715）を図示した。

647 は杯 H 蓋の口縁部破片である。天井部と口縁部の境目に稜は認められない。648 は杯 H 身であり、口縁部はやや内傾して高く立ち上がる。649 は天井部にヘラケズリを施す蓋と考えた。650 は口縁端部が垂下し、蓋と推測される。651 は撫肩の器形をもつ。外面に自然釉がかかり蓋と考えた。652 は口縁端部が短く折れ、摘みとなりそうな箇所で欠損している。ここでは蓋と考えた。653 はヘラケズリにより腰部を明瞭にした杯 A と推測される。654 は高台が貼り付く箇所で欠損しており、杯 B と推測される。655 は高台が方形と呈する杯 B である。656・657 は体部から口縁にかけて傾きをもって立ち上がる杯と推測される。658 は口縁端部がつよく屈曲する杯の口縁部破片である。8 世紀末葉あ

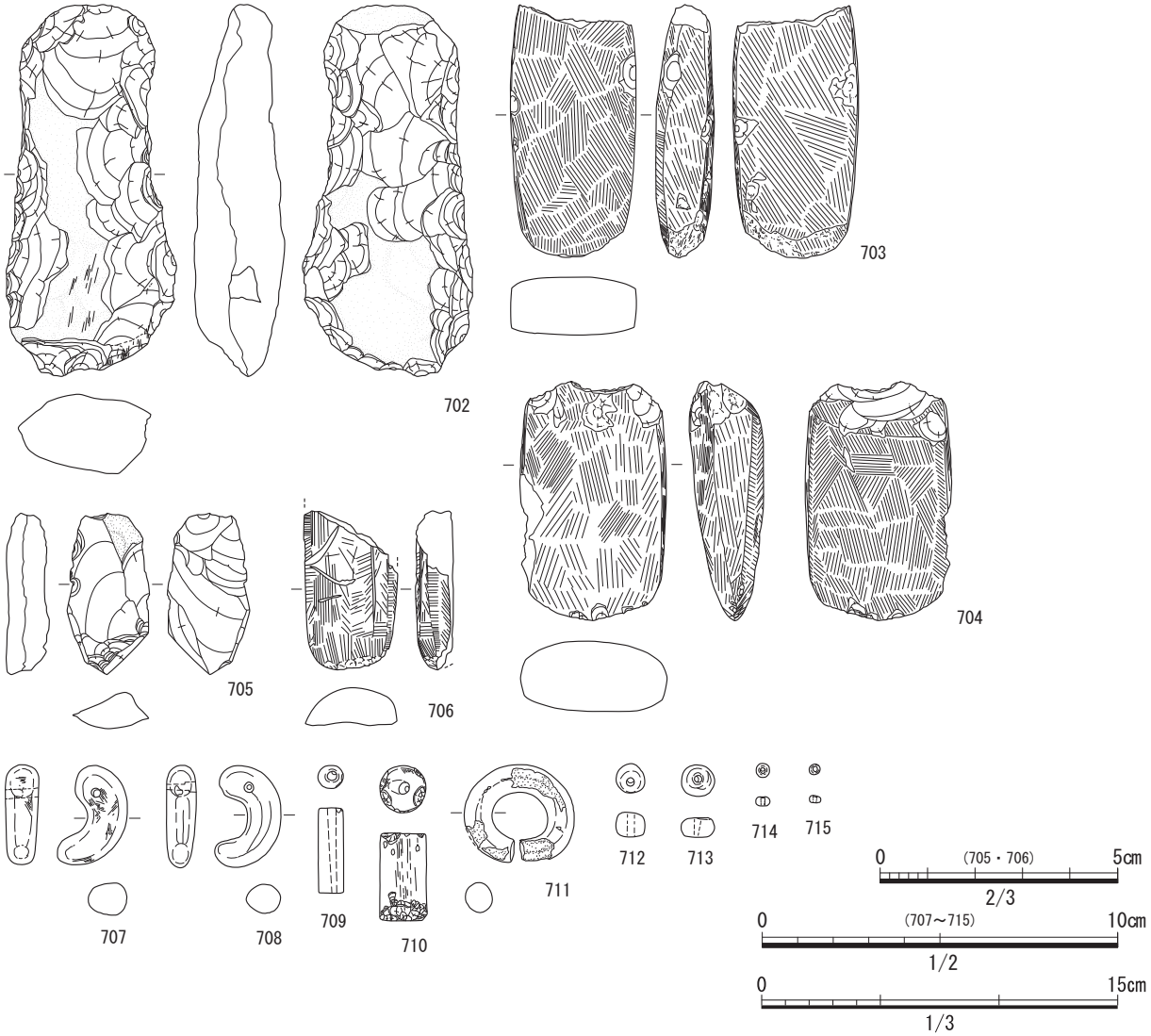


第 61 図　高野巾ノ上遺跡遺物実測図 (1)



第 62 図　高野巾ノ上遺跡遺物実測図 (2)

たりのものと推定される。659 は須恵器碗 B の底部破片である。高台が外側を向く。660 は縁帯の形状をなす瓶の口縁部破片である。661・662 は壺か瓶の体部破片である。661 は肩部に強い稜を持つ。663 は甕である。664・665 は灰釉陶器の椀である。ともに口縁端部が外反する器形を持つ。666 は土偶である。鼻は粘土紐により、目と口は刺突により表現する。また細い粘土紐で髪を結う表現を行う。さらに眉と髭を沈線により表す。両頬にも沈線が認められ、刺青などの化粧を表現している可能性もある。667 ～ 680 は石鏃である。667 ～ 674 は凹基無茎鏃、675 ～ 678 は平基無茎鏃、679・680 は平基有茎鏃である。671 は珪質頁岩製であり、乳白色を呈する。681 ～ 683 は石錐である。681 は基部が欠損するが、柱状のもので錐部は丸みを帯びるまで使用されている。682 は錐部が欠損するが、細かい剥離により錐部を作出している。683 は幅広の剥片の一端に微細な剥離により錐部を作り出したものである。684 ～ 689 は上下両端に剥離か潰れが認められる楔形石器である。684 ～ 687 の剥離は微細であり、688・689 の剥離は大きい。使用目的が異なっていたものと推測される。685 は高山市の十三墓峠で産出する玉髄で作られたものであり、紫がかった乳白色を呈する。690 ～ 698 はスクレイパーである。690 ～ 692 は微細な剥離により 3 辺に刃部を有する。696 は石匙の形状を成すが摘みを



第 63 図　高野巾ノ上遺跡遺物実測図 (3)

明瞭に作出していないためスクレイパーとした。697・698 は微細な剥離により円形の刃部を作出している。690 は玉髄製であり、紫がかった乳白色を呈する。699 は石核である。700 ～ 702 は打製石斧であり、702 の表裏両面には自然面が残り、表面に土づれ痕も観察できる。703・704 は磨製石斧であり、ともに製作時の研磨痕が顕著である。705 は左側面に刃毀れによる剥離が認められる UF である。706 は製作時の敲痕と研磨痕が全面に残る石刀の破片である。

707 ～ 715 は、上野井西古墳の出土遺物と同様に、信包八幡神社跡前方後円墳の出土遺物として千光寺に所蔵されてきたものである（丹生川村教委 1990）。今回の調査で「高野組字塚腰」と記載されていたことが明らかとなった。ここでは参考資料として掲載する。707・708 は碧玉製の勾玉である。片側より穿孔する。全体的に研磨で丸く仕上げる。709・710 は碧玉製の管玉である。有孔は片側穿孔による。711 の耳環は青銅製のものに鍍金を施す。一部鍍金が剥離している。712 ～ 713 はガラス製丸玉である。半透明の濃青色を呈する。どちらも孔と平行方向に気泡が流れているように観察でき、引き伸ばし法により製作されたと推測される。

調査カードでも縄文時代の遺跡とされている高野巾ノ上遺跡で、石鏃・楔形石器・石棒など多くの縄文時代の石器・石製品を確認した。また、杯 H などが認められ、遺跡が所在する段丘端部に高野巾ノ上古墳が所在し、さらに聞き取りでも他にも塚があったとの話が残っていることから、古墳時代にも何らかの営みがあったものと推測される。古代でも須恵器杯 A・杯 B や灰釉陶器が認められる。これらから、縄文・古墳・古代の散布地と考えられる。

67　高野巾ノ上古墳（遺跡番号 21217-06557）

古川町高野字巾ノ上に所在し、宮川左岸の段丘端部に立地する。

古くから、古墳の所在が知られていた（多賀 1941）。踏査では、径約 12.0 m、高さ 2.0 m程度の高まりを確認した。

68　高野水上古墳（遺跡番号 21217-00199）

古川町高野字水上に所在し、宮川支流の高野谷川右岸の山麓裾部に立地する。県史跡である。

江戸時代にはすでに開口していたようで、石室が計測されている（角竹 1916）。また、研究対象としても取り上げられてきた（岡村 1921、多賀 1941）。1959（昭和 34）年に岐阜県史跡に指定され、学術的な位置付けがなされた（大野 1972）。それによると、径 15.0 m、入口部で高さ 5.0 mを測る。石室は、両袖式横穴式石室であり、南東側に開口する。石室全長は 10.5 mであり、玄室の長さは 5.3 m、奥壁の幅 2.3 m、高さ 2.5 mを測る。奥壁は巨大な一枚石を用いる。
巨石を用いる石材の使い方から、後期古墳と考えられている（河合 2015b、藤井・森島 2013）。

69　高野溝添遺跡（遺跡番号 21217-06556）

古川町高野字溝添に所在し、宮川支流の高野谷川右岸の緩斜面に立地する。

調査カードには縄文時代後期の遺跡とされ、土地改良により滅失したと記録される。

踏査では遺物の確認は無かった。縄文時代の散布地であったと考えられる。

70　高野溝添古墳（遺跡番号 21217-00198）

古川町高野字溝添に所在し、宮川支流の高野谷川右岸の緩斜面に立地する。

古くから古墳の存在は知られる（多賀 1941）。調査カードには前方後円墳と記録される。最近、飛騨考古学会が測量を行った（町川 2019）。

踏査では、盆地側が削られている可能性が高い状況を確認した。墳形は知りえない。

71　谷遺跡（21217-00141）

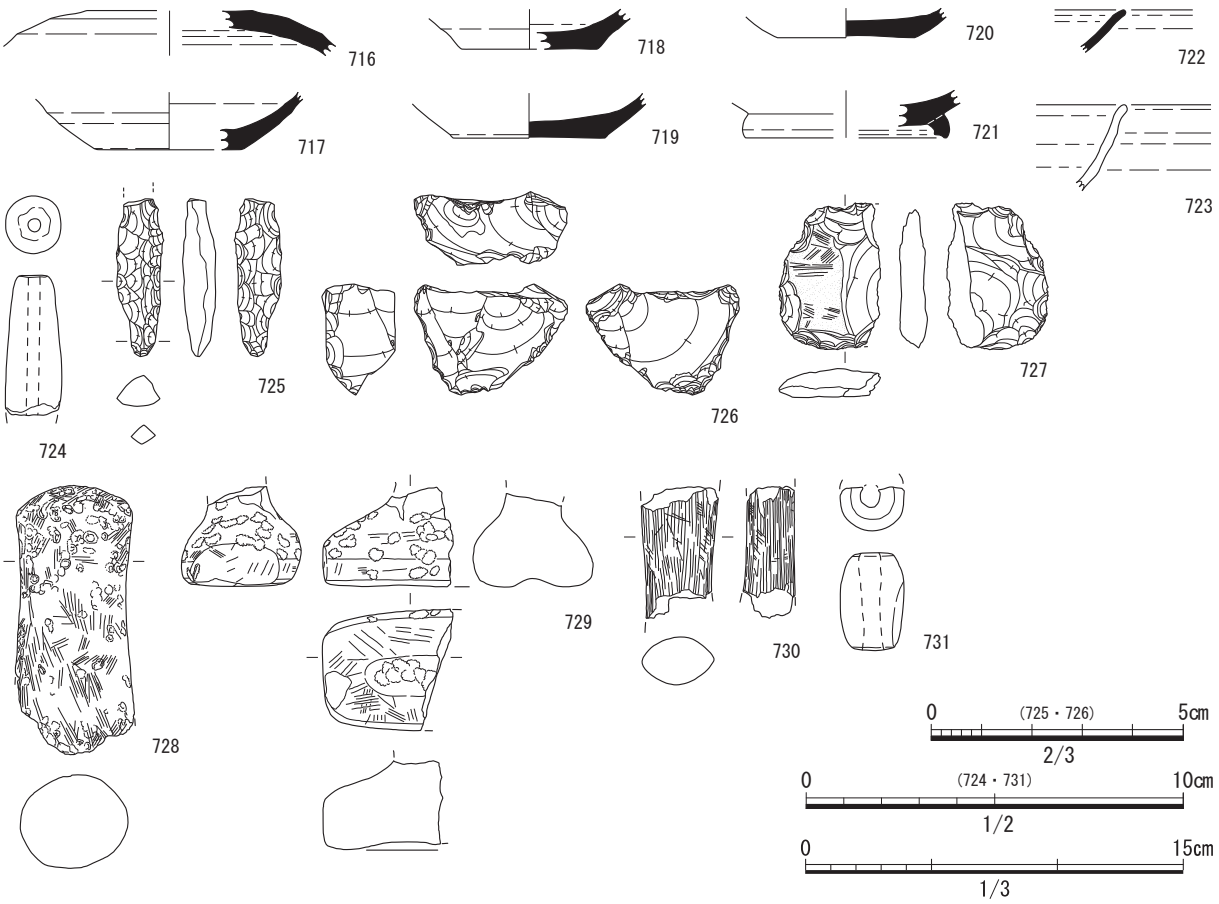
古川町谷字立道に所在し、盆地北端の宮川左岸の南東向き河岸段丘に立地する。

縄文土器や石器の出土は古くから知られる（岡村 1921、栗山 1968）。また独鈷石の出土も紹介された（高山市教委 1987）。

踏査では、段丘緩斜面において遺物散布が認められた。また、遺物の寄贈も受けた。

遺物は、縄文土器 13 点、須恵器古墳時代器種 1 点、須恵器古代器種 70 点、灰釉陶器 3 点、その他中世陶磁器等 1 点、近世陶磁器 10 点、近現代遺物 1 点、年代不明陶磁器 4 点、石錐 1 点、スクレイパー 3 点、その他剥片石器 1 点、石核 1 点、打製石斧 2 点、合計 111 点を採集した。また、遺物の寄贈も受けた。今回は、須恵器 7 点（716 ～ 720）、灰釉陶器 1 点（723）、土製品 1 点（724）、石器・石製品 7 点（725 ～ 731）を図示した。

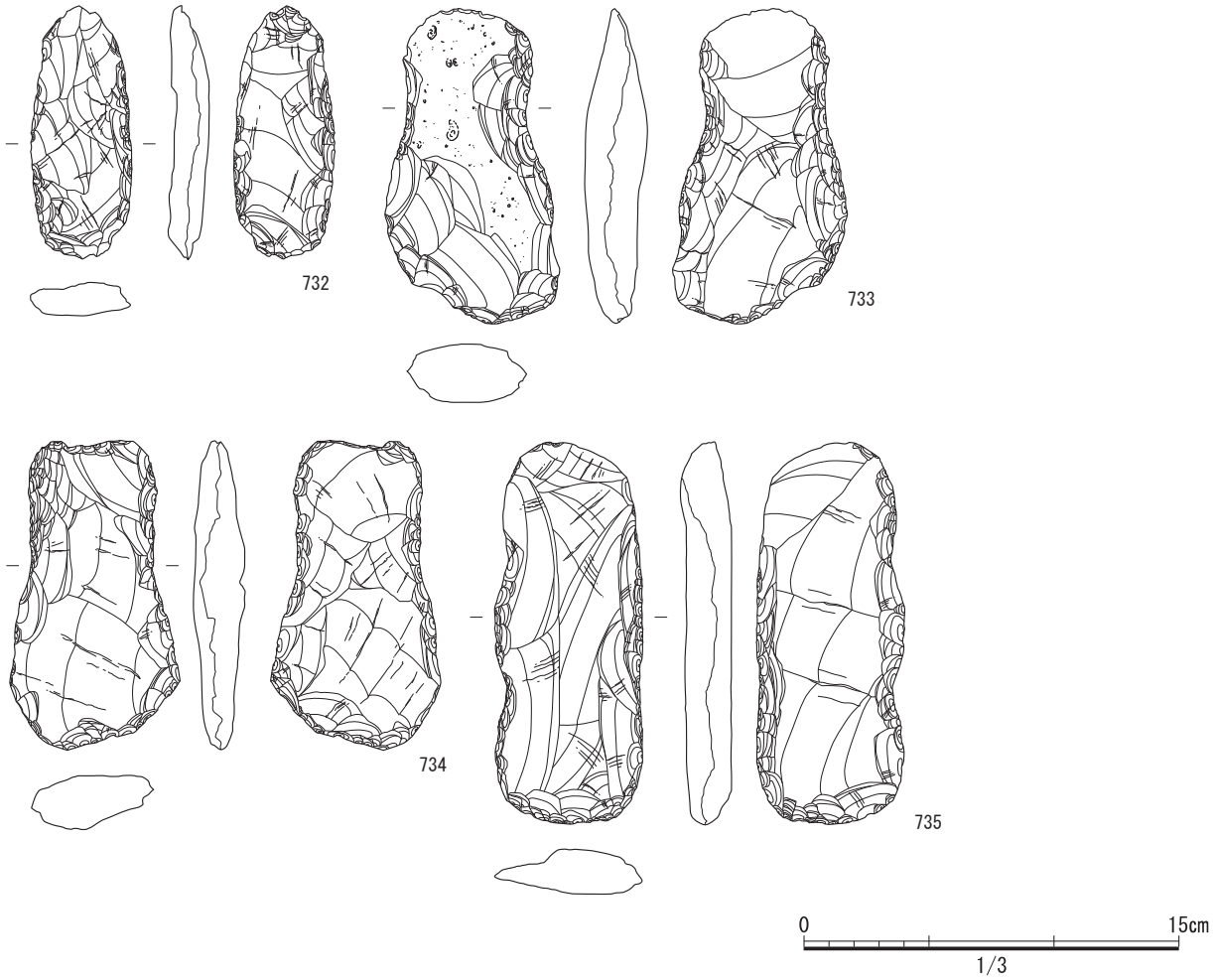
716 は天井部にヘラケズリを施す蓋である。717 ～ 720 は底部の切り離しが糸切りであり、体部が



第 64 図　谷遺跡遺物実測図

やや丸みを持つことから椀 A と推測される。721 は高台が内側に屈曲し、体部は内湾しそうであり、椀 B と推測される。722 は体部の傾きが緩く、皿と推測される。723 は灰釉陶器椀である。体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部が外反し、端部を丸く仕上げる。724 は土錘である。細形管状の形状を呈する。725 は柱状の石錐であり、断面は三角形を呈する。726 は石核である。727 は小型の打製石斧である。728 は石棒の頭部破片である。敲打の後研磨によって仕上げられる。飛騨市宮川町塩屋で産出する塩屋石で作られている。小型石棒の形状から縄文時代後期のものと推定される。729 は石冠である。底面と側面を平滑に仕上げ、底面中央を敲打と研磨で凹ませる。飛騨市宮川町塩屋で産出する塩屋石で作られている。縄文時代晩期のものと推定される。730 は両側面に鎬を持ち、断面形状がレンズ状になるため、石剣と考えられた。縄文時代晩期のものと推定される。731 はヒスイ製の管玉である。体部が中膨れし、棗状の形状を呈する。両側から穿孔する。

谷遺跡は古くから縄文時代の遺物が散布することで知られていたが、今回の石製品から、縄文時代でも後晩期主体になると考えられる。なお、731 と同形状のヒスイ製管玉は、中野山越遺跡でも出土する。また、石川県チカモリ遺跡・御経塚遺跡・真脇遺跡から出土し、いずれも晩期のものである（伊藤・谷口 2006）。このため、731 も晩期のものと推定される。また、須恵器椀 A、灰釉陶器椀に加え、土錘も採集したことから、古代にも人々の営みはあったのだろう。これらから、谷遺跡は縄文時代、古代の散布地と考えられる。



第 65 図　谷宇土遺跡遺物実測図

72　谷宇土遺跡（21217-11787）

古川町谷字宇土に所在し、宮川左岸の東向き河岸段丘、丘陵崖下の平坦地に立地する。

土地改良が終了しているため、踏査で遺物を採集することはできなかった。飛驒の山樵館に、過去に寄贈を受けた遺物が保管されていた。当時の寄贈者から聞き取りを行い、出土した地点は一区画内でまとまっていたことなどが分かった。今回は、打製石斧 4 点（732 ～ 735）を図示した。733 は表面に自然面を残す。733・734 は側面に抉りを入れて撥形となる。

過去の採集遺物から、縄文時代の散布地と考えられる。

73　種村古墳（21217-06501）

古川町下気多字塚越に所在し、宮川右岸の河岸段丘の平地中央に立地する。

1959（昭和 34）年に石室の検出状況を実測した図面が残り、出土した鉄刀や土師器が飛驒の山樵館収蔵庫及び千代の松原公民館に収蔵されている。また、その後も畑地から見つかった土器類が飛驒の山樵館収蔵庫に 28 点保管されていた。聞き取りによると、土地改良前は円形だったとのことである。

踏査では、周辺の土地改良が終了しており、古墳が周囲から一段高い方形区画の畑地となっていることを確認した。

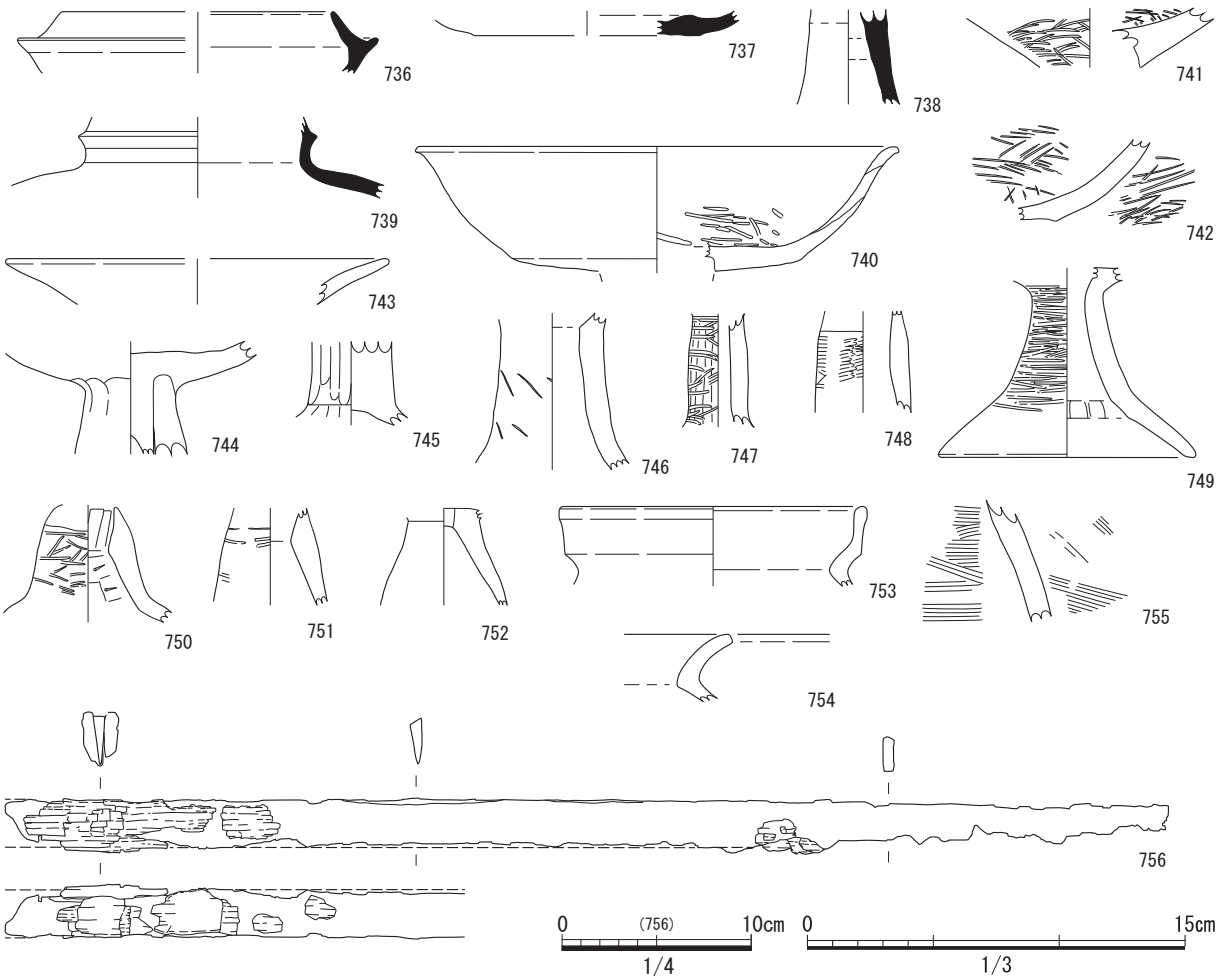
遺物は、土師器古墳時代器種 2 点、須恵器古墳時代器種 2 点、須恵器古代器種 10 点、その他中世陶磁器等 1 点、近世陶磁器 1 点、剥片石器 1 点、剥片 1 点、石核 1 点、合計 19 点を採集した。すでに保管されていた遺物も含め、今回は、須恵器 4 点（736 ～ 739）、土師器 16 点（740 ～ 755）、鉄刀 1 点（756）を図示した。

736 は須恵器杯 H 身である。受部は内湾し、口縁部は内傾して高く立ち上がる。737 は底部切り離しがヘラ切りであり、杯 G 身と推測される。738 は高杯の破片であり、長脚のものである。739 は壺の頸～肩部の破片である。垂直に口縁部へ立ち上がり、胴部上半の肩部にかけての破片で、頸部に強い稜を有する。短頸壺の破片と推測されるが、ここでは壺瓶類とした。740 ～ 752 は土師器高杯である。740 ～ 743 は杯部破片である。杯部の全形を知れるのは 740 である。内湾しながら立ち上がり口縁部は外反する。740 は内面に、741・742 は内外面にミガキを施す。744 は杯～脚部にかけての破片、745 ～ 752 は脚部破片である。745 ～ 748 は脚部が柱脚状であり、745 は裾部との境が明瞭である。749 ～ 752 の脚部は斜め下方にハの字状に広がる器形であり、749 は裾部との境が明瞭でなく、裾部は内湾して開く。744 は脚部に縦方向のケズリを、746 は斜位のナデを施す。745 は縦方向のミガキ、747 ～ 751 は横方向のミガキを施す。753 は北陸系の有段口縁甕の口縁部破片である。口縁内面に段を有し、端部は垂直に立ち上がる。外面に施文はない。弥生時代後期後半～古墳時代前期のものと推定される。754 は土師器甕の口縁部破片である。口頸部がくの字状に屈曲する。概ね古墳時代後期のものと推定される。755 は甕の胴部破片であり、内外面にハケ目を施す。756 は鉄製の直刀である。刃部は切先と刃先の多くが欠損する。一部に木質が残り、鞘であった可能性がある。刃先が残る部分の断面は鋭い二等辺三角形の楔形を呈する。茎部は欠損により失われている。

遺物は年代幅があるが、杯 H736 などを根拠とすると、古墳時代後期の古墳と考えられる。

74　寺地峠ヶ洞 1・2 号古墳（遺跡番号 21217-11788・11789）

古川町寺地字峠ヶ洞に所在し、山頂尾根に立地する。



第 66 図　種村古墳遺物実測図

踏査では、山中の尾根沿いに２基の古墳を確認した。

１号墳は円墳である。墳裾部で長径 11.8 m、短径 10.3 m、墳頂部で長径 5.7 m、短径 5.5 mを測り、高さ 2.7 mである。北東側で縦 2.0 m、横 0.5 mの範囲に集石を確認した。

２号墳は円墳である。墳裾部で長径 11.0 m、短径 9.0 m、墳頂部で長径 5.5 m、短径 4.5 mを測り、高さ 1.7 mである。脇を山道が通るが、余り段差はない。

75　寺地土洲ヶ洞古墳（遺跡番号 21217-11790）

古川町寺地字土洲ヶ洞に所在し、山頂尾根に立地する。

踏査では、巨石の集石する場所を確認し、古墳の可能性があると考えた。

76　寺地西ヶ洞１～５号古墳（遺跡番号 21217-06523・06524・11817 ～ 11819）

古川町寺地字西ヶ洞に所在し、山頂に立地する。

１・２号墳は調査カードでは、円墳とされる。踏査では、登録された位置で古墳上の高まりを確認することができなかった。

３号墳は円墳である。墳裾部で長径 16.5 m、短径 14.0 m、墳頂部で長径 7.0 m、短径 5.3 mを測り、

高さ 2.4 ｍである。周囲には溝状の段差がある。

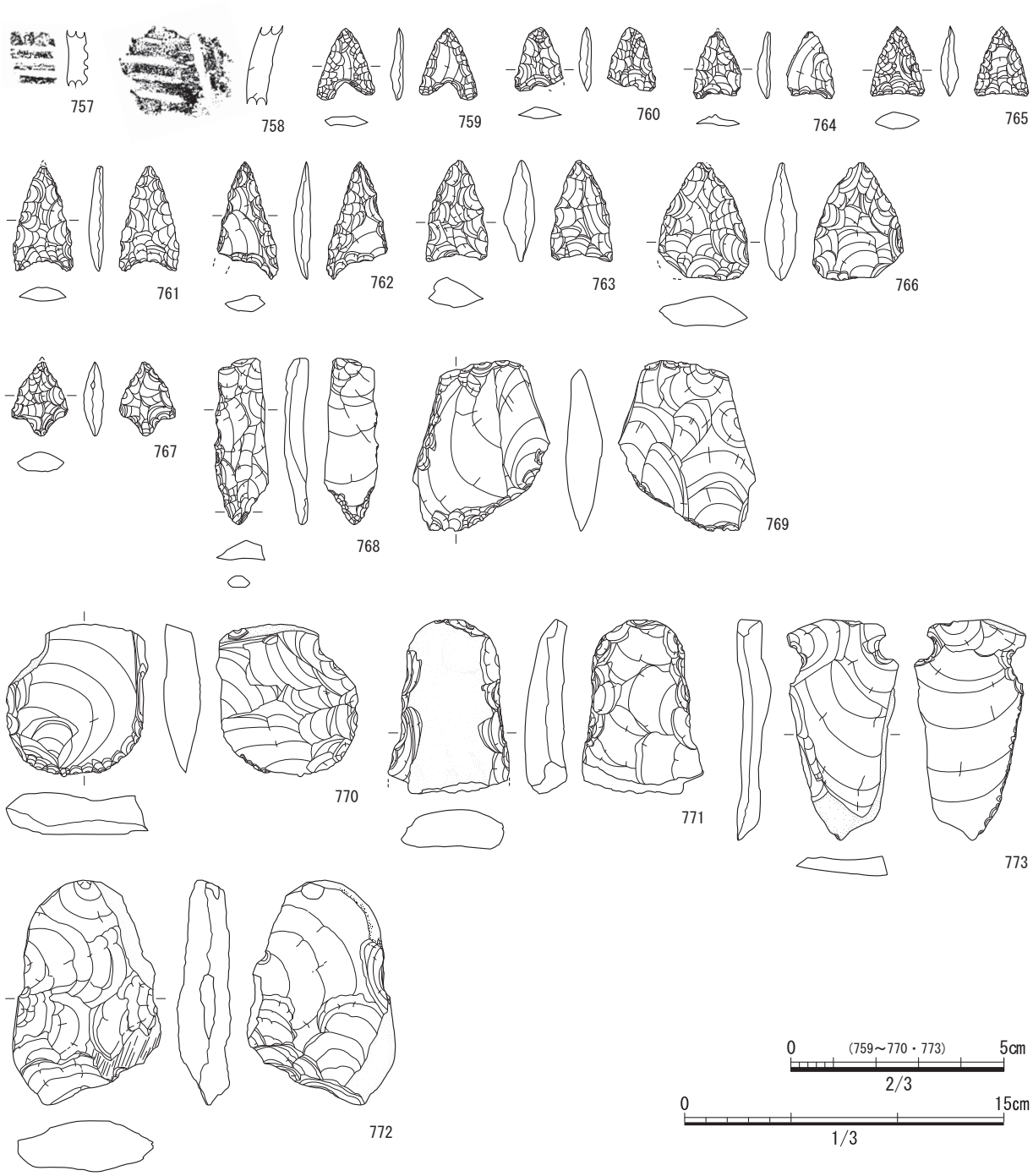
4 号墳は円墳であり、高さ 8.0 ｍを測る。

5 号墳は、集石する場所を確認し、古墳の可能性があると考えた。

77　戸市遺跡（遺跡番号 21217-00140）

古川町戸市に所在し、宮川の支流戸市川左岸の狭小な河岸段丘に立地する。打製石斧・磨製石斧・石冠などの出土が知られていた（多賀 1941、高山市教委 1987、中島 1983、吉朝 1994）。

1975 ～ 78（昭和 50 ～ 53）年代の土地改良の際に遺物が出土したと伝わる。踏査では、土地改良



第 67 図　戸市遺跡遺物実測図

が終了しているものの、遺物が散布する状況を確認した。

遺物は、縄文土器 35 点、瀬戸美濃焼 1 点、珠洲焼 1 点、近世陶磁器 9 点、年代不明陶磁器 3 点、石鏃 13 点、石錐 8 点、楔形石器 10 点、スクレイパー 42 点、その他剥片石器 27 点、剥片 96 点、石核 1 点、打製石斧 3 点、その他石製品 2 点、合計 251 点を採集した。今回は、縄文土器 2 点（757・758）、石器・石製品 15 点（759 ～ 773）を図示した。

757 は半截竹管状工具による横位半隆起線が認められ、古串田新式期の縄文時代中期中葉のものと推定される。758 は沈線により施文する。759 ～ 767 は石鏃である。759 ～ 762 は凹基無茎鏃、763・766 は平基無茎鏃、767 は平基有茎鏃である。768 は微細な剥離により錐部を作出した石錐である。769 は上下両端に剥離痕が認められ、楔形石器である。770 は微細な剥離で円形の刃部を一端に形成するスクレイパーである。771・772 は打製石斧であり、771 は表面に自然面を残す円礫利用のものである。772 は刃部に土づれ痕が遺存する。773 は側縁に刃部を持つ縦型石匙である。

多くの石器が残りのよい状況で認められた。対して、図示できた縄文土器は 2 点であった。縄文土器 757 からは、縄文時代中期の遺跡である可能性が高く、戸市遺跡は縄文時代の散布地と考えられる。

78　戸市長者跡（遺跡番号 21217-06512）

古川町戸市字古屋敷に所在し、宮川の支流戸市川左岸の丘陵端部に立地する。

江戸時代の月海長者跡と伝わり、かつて兜仏、和鏡が出土したと伝わる。

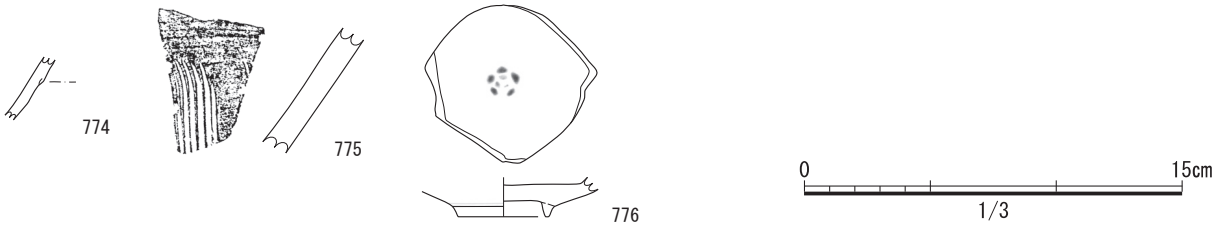
土地改良が終了しており、踏査では明確に遺跡を捉えることができなかった。遺物は近世陶磁器 4 点を採集し、3 点（774 ～ 776）を図示した。774 は内面と外面の上方に鉄釉が施され、天目茶碗と推測される。775 は 6 条以上のすり目を有するすり鉢である。776 は染付の皿である。見込みに花文を施す。伝承と一致するかは知りえないが、近世遺物の散布地と考えられる。

79　戸市古屋敷 1・2 号墳（遺跡番号 21217-06513・06514）

古川町戸市字古屋敷に所在し、宮川の支流戸市川左岸の丘陵端部に立地する。

戸市の山腹に 1 基、山麓に 2 基の古墳があったと知られ（多賀 1941）、この 2 基はこのうち山麓の 2 基であった可能性がある。調査カードには、土地改良で滅失と記録される。

踏査では、土地改良が終了しており、位置の特定が難しい状況を確認した。

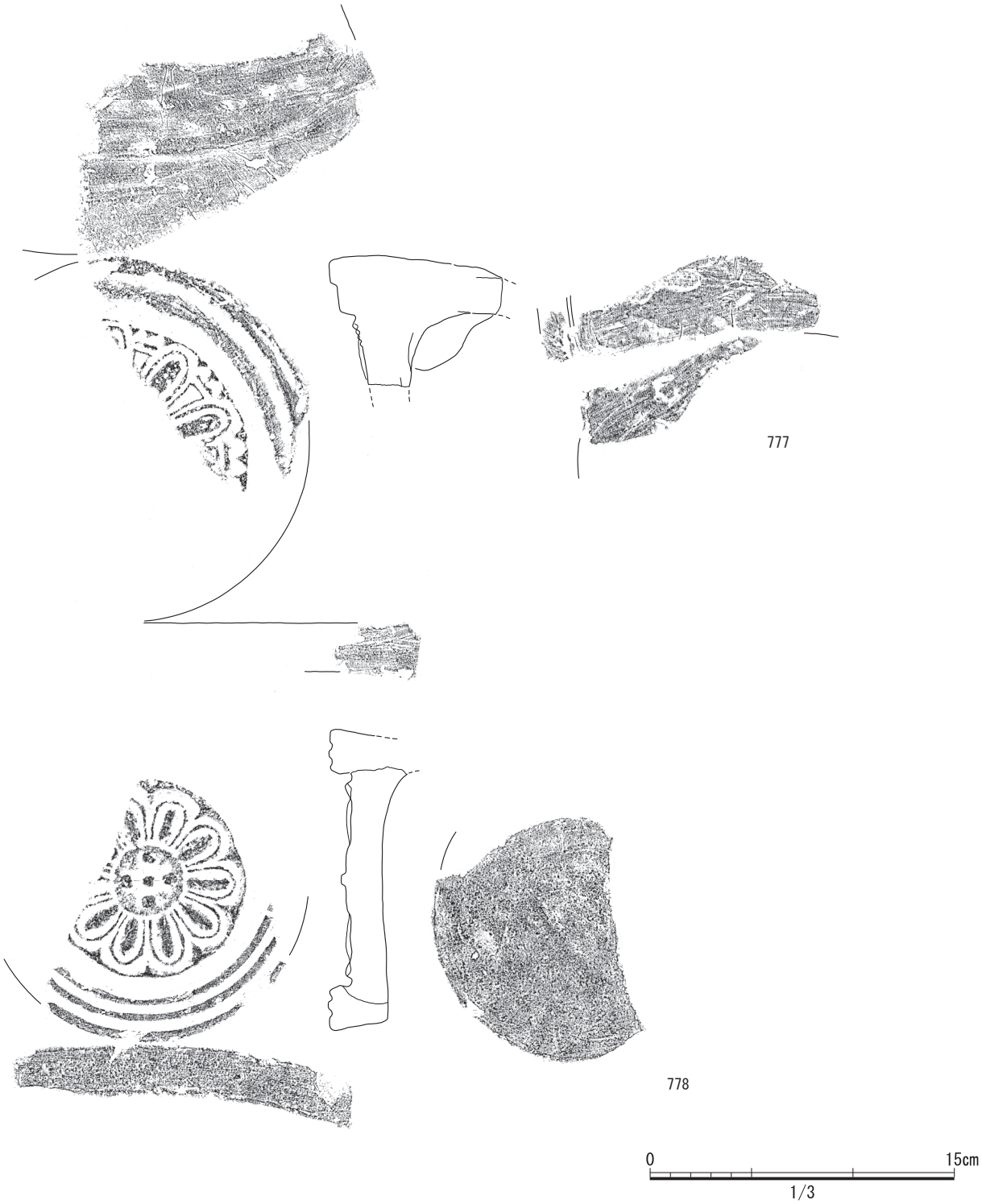


第 68 図　戸市長者跡遺物実測図

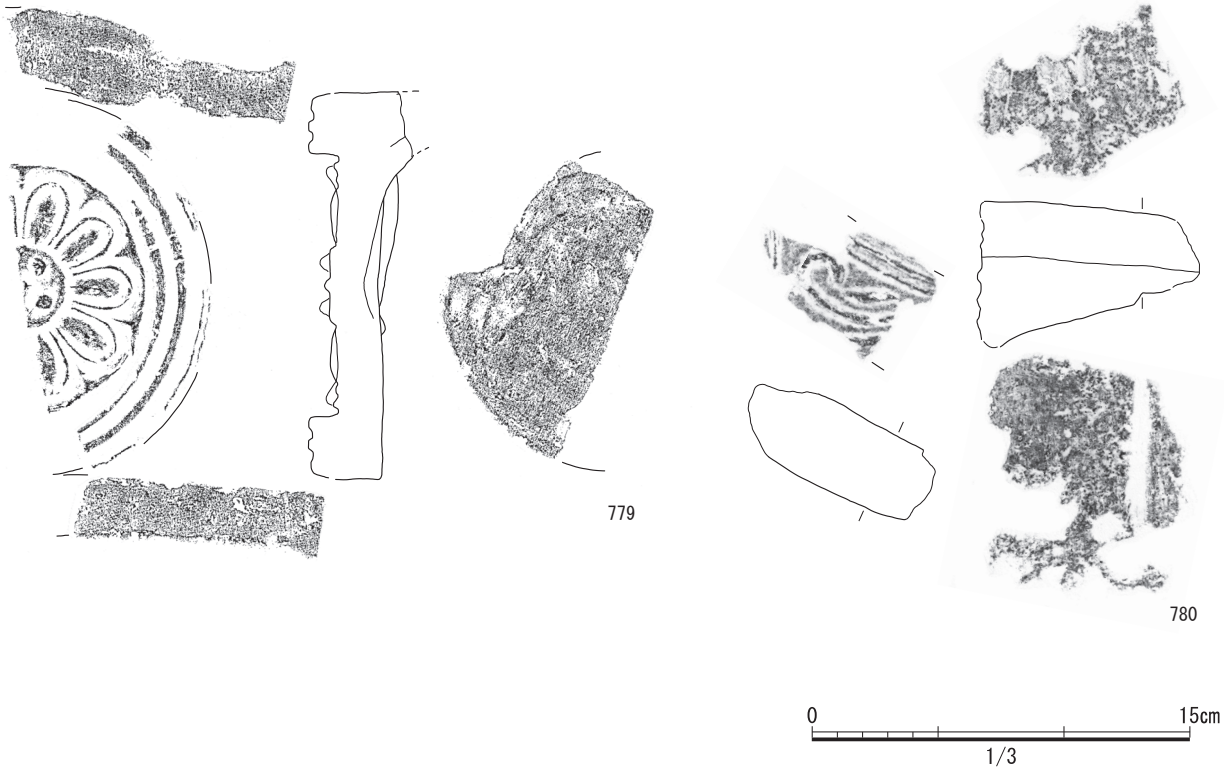
80　塔ノ腰廃寺跡塔心礎（遺跡番号なし）

古川町殿町の円光寺に、上町に所在した塔ノ腰から移した塔心礎がある。市指定文化財である。

塔ノ腰廃寺跡は、上町字大日から高山市国府町広瀬にかけて所在する古代寺院と位置付けられてきた（八賀 2001、三好 2015）。しかし、塔ノ腰は上町字久中の小字であったという指摘がある（堀 2018）。今報告では、上町廃寺跡の項で述べたように、両古代寺院を分けて報告し、このことについては、今後の課題としたい。



第 69 図　塔ノ腰廃寺遺物実測図 (1)



第 70 図　塔ノ腰廃寺遺物実測図 (2)

今回は、古川小学校から寄贈を受けた「塔ノ腰」の札が付く軒丸瓦 3 点（777 ～ 779）と、大野用水掘削時に出土したと伝わる軒平瓦 1 点（780）を図示した。

777 は有段素文縁単弁十弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当の破片であり、中房を欠損する。圏線と膨らみにより表される連弁と、2 つの連続鋸歯文が先端に付く三角形圏線で表される間弁からなる。丸瓦とは瓦当裏面上端で接合する。丸瓦部凸面はケズリを施す。瓦当側面と裏面は丁寧なナデを施す。778・779 は三重圏線文縁単弁十弁蓮華文軒丸瓦である。円形の中房に 1+4 の蓮子を配する。丸みを持つ蓮弁の中央には凸線があり、そこからさらに左右 2 本ずつ凸線がのび、忍冬文の形態をとる。瓦当側面と裏面は丁寧なナデを施す。780 は重圏線縁均整唐草文軒平瓦である。左側縁部の破片である。1 本の唐草に上下 1 本ずつの子葉を配すが、全景を知りえない。

81　中気多三塚 1 ～ 3 号古墳（遺跡番号 21217-06493 ～ 06495）

古川町壱之町に所在し、宮川右岸の沖積地に立地する。

『斐太後風土記』には蛇塚、平塚、地蔵塚と記され（富田 1915）、これが三塚と言われたようである（富田 1965）。1809（文化 6）年に蛇塚から鈴が出土し、田中大秀の所有に至った（犬塚 1939）。

現在は墳丘もなく、位置の特定は難しい。

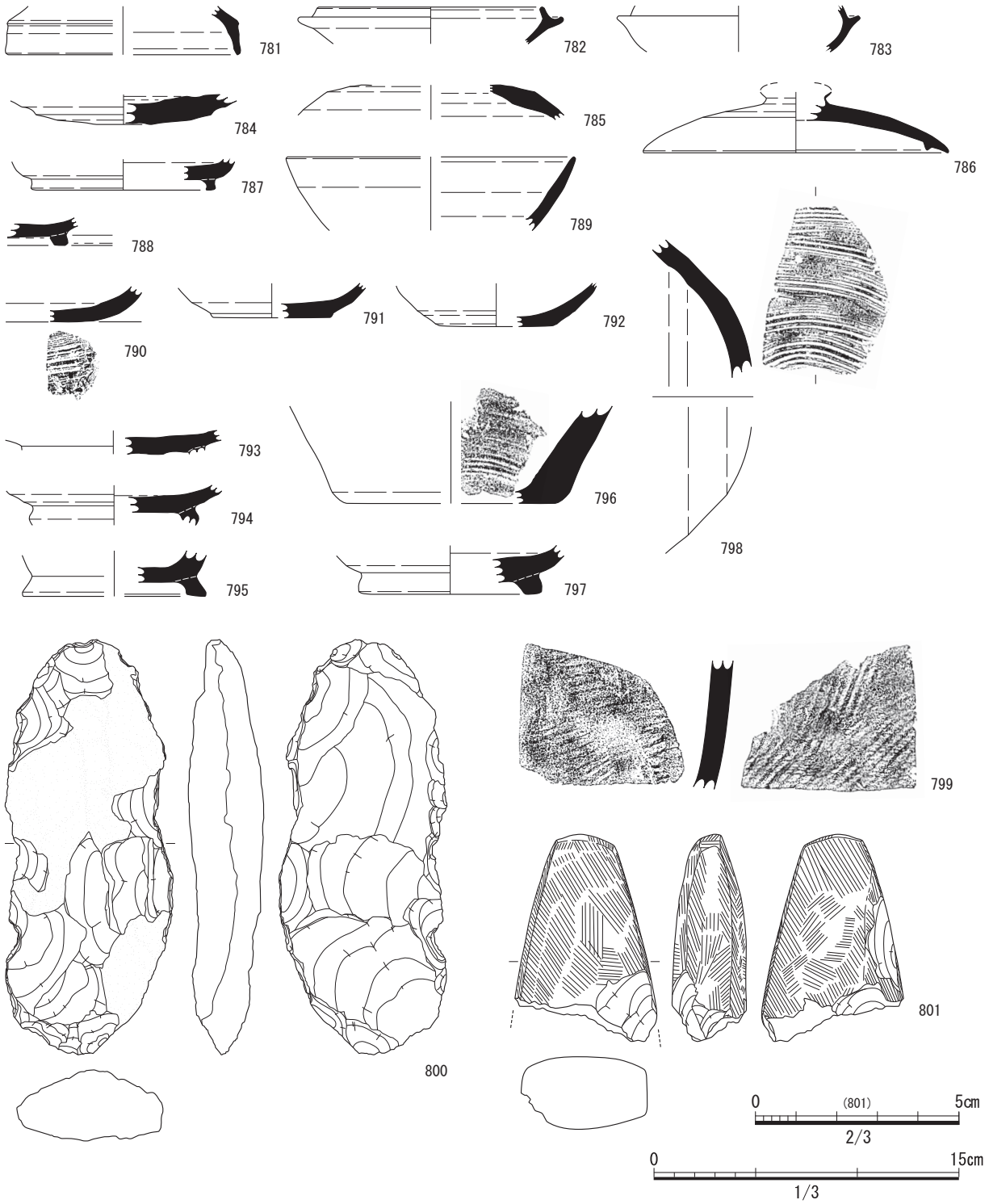
82　中野大洞平遺跡（遺跡番号 21217-06535）

古川町中野字大洞平に所在し、宮川左岸の河岸段丘に立地する。

県営農道整備事業に伴い、岐阜県により 2002・03（平成 14・15）年度に発掘調査が行われた（㈶岐阜県教育文化財団 2006）。調査では、縄文・弥生・奈良時代の竪穴建物跡が見つかった。また、弥

生時代の方形周溝墓も同時に検出し、当時、飛騨地方で初めて弥生時代の集落と墓域を同時に確認した調査となった。

踏査では、段丘平坦面から下方の緩斜面地にかけて多くの遺物が散布するが、多くは宅地化されている状況を確認した。



第 71 図　中野大洞平遺跡遺物実測図

遺物は、縄文土器 1 点、須恵器古墳時代器種 20 点、古代器種 200 点、灰釉陶器 3 点、瀬戸美濃焼 3 点、その他中世陶磁器等 1 点、近世陶磁器 18 点、近現代遺物 3 点、時期不明陶磁器 4 点、スクレイパー 2 点、剥片 4 点、打製石斧 1 点、磨製石斧 1 点、凹石類 1 点、合計 262 点を採集した。今回は、須恵器 19 点（781 ～ 799）、石製品 2 点（800・801）を図示した。

781 は杯 H 蓋である。天井部と口縁部に明瞭に稜を持つ。782・783 は杯 H 身である。782 は受部が若干内湾し、端部を丸く仕上げる。口縁部は内傾して短く立ち上がり、端部を丸く仕上げる。783 は口縁部を欠損するが、受部の先端は丸く仕上げる。781 ～ 783 は器形から 7 世紀前半代のものと推定される。784 は杯底部であるが、杯 H 身と推測される。785 は蓋の破片である。786 は短い返りを持つ杯 G 蓋である。天井部の 1/2 まで回転ヘラケズリを丁寧に施す。787・788 は高台が方形を呈する杯 B である。787 の高台内側は内湾する。789 は底部に回転糸切り痕が遺存する。790 ～ 792 は椀 A である。切り離しが糸切りであり、体部は内湾する。内湾する体部の形状から椀と推測した。791 は体部が若干内湾し、開き気味に立ち上がる杯である。792 は底面にハケ目を施す。793・794 は椀 B である。794 は高台先端が欠損するが、高台外側が内側に折れ、全体として三日月形状になると推測される。795 は全体に内湾する高台の形状から壺瓶類の底部破片と推測される。796 は厚めの器壁を持ち、高台がなく、鉢と推測されるが壺の可能性もある。内面にハケ目を施す。797 は厚めの器壁を持ち、ほぼ方形の高台が貼付けるため、鉢と推測される。798 は外面にカキ目を有するため、堤瓶の体部破片と推測される。799 は外面に敲き痕、内面に当て具痕が遺存し、甕の胴部破片である。800 は打製石斧である。磨滅が著しい。801 は刃部が欠損した磨製石斧である。

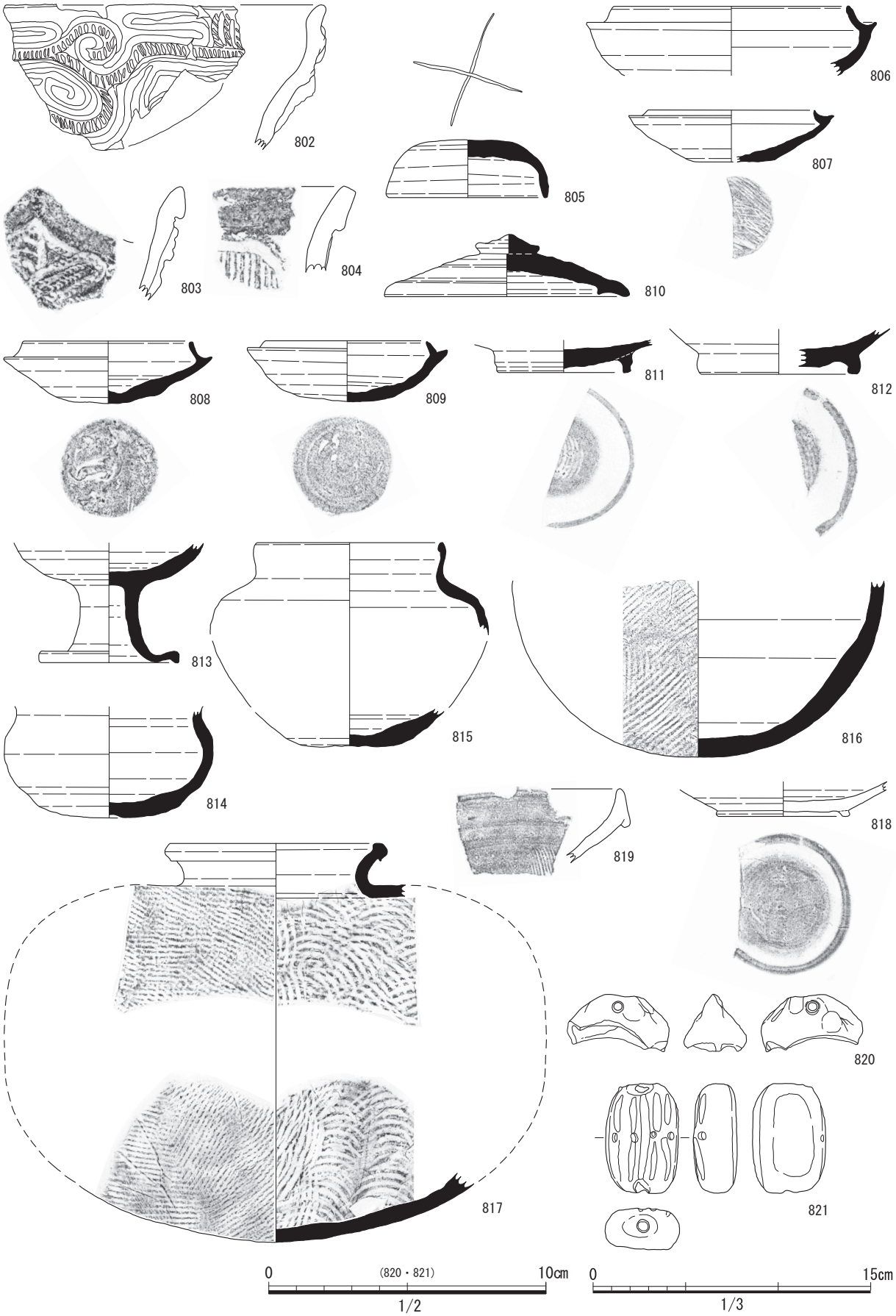
古墳時代から古代にかけての須恵器を中心に、縄文時代の石器も認められた。これまでの調査成果からも、縄文・弥生・古代の集落遺跡と考えられる。

83　中野トンビヶ洞遺跡（遺跡番号 21217-06533）

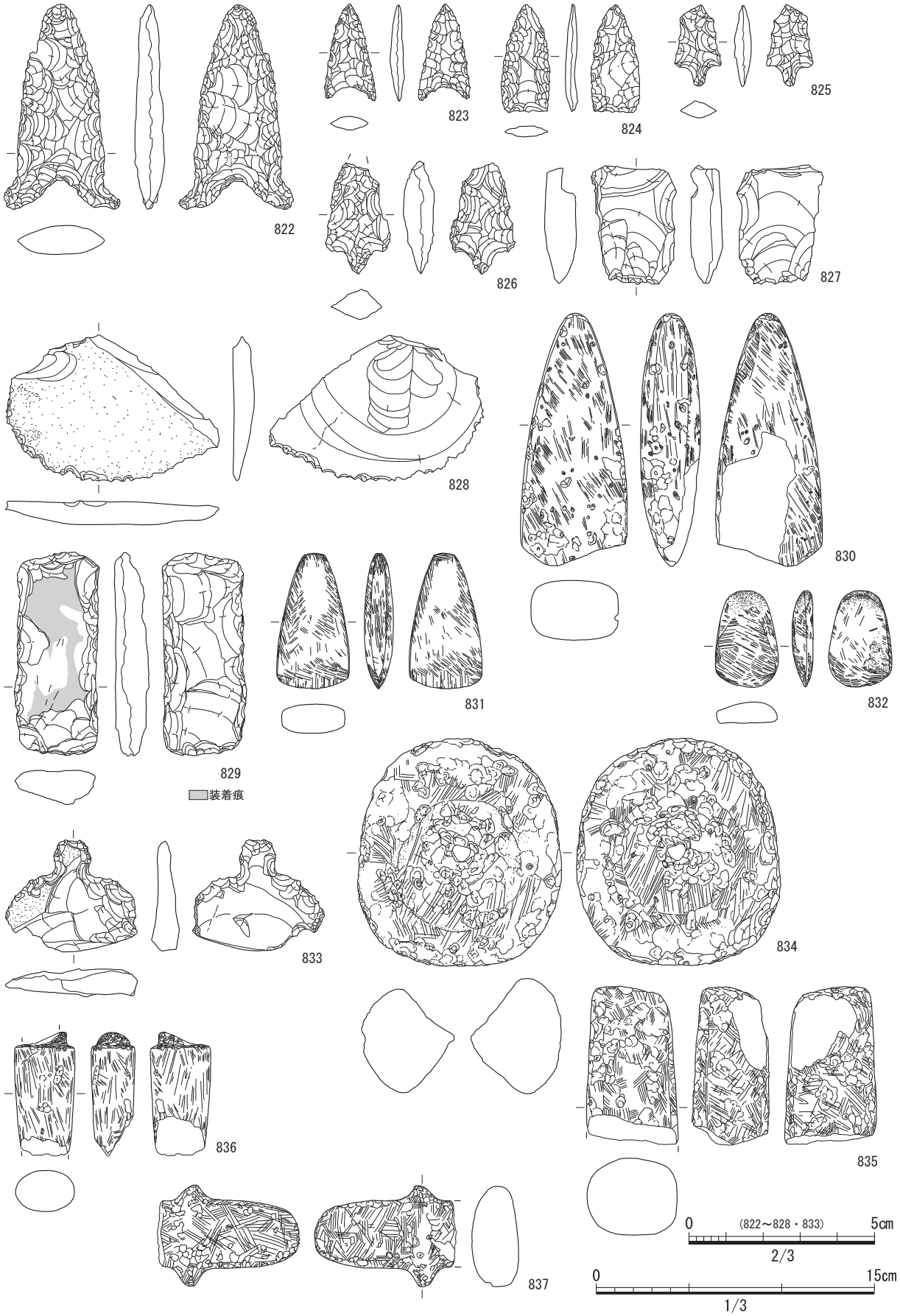
古川町中野字トンビヶ洞に所在し、宮川左岸の河岸段丘と丘陵の境、緩斜面に立地する。

現状では荒地となっており、遺物の散布が認められなかったが、過去に同地で出土した遺物の寄贈を受けた。また、出土した場所は狭小な段丘平坦地であったことも分かり、遺跡範囲を確定することができた。今回は、縄文土器 3 点（802 ～ 804）、須恵器 13 点（805 ～ 817）、灰釉陶器 1 点（818）、近世陶器 1 点（819）、土製品 2 点（820・821）、石器・石製品 16 点（822 ～ 837）を図示した。

802 は口縁形状が平縁で、口縁部はゆるく内湾し端部が外反する。隆帯と沈線で渦巻文を施し、基隆帯にはヘラ状工具によるキザミを施す。803 は波状口縁で、口縁直下に隆帯と沈潜で施文する。802・803 は北陸系の串田新式期の縄文時代中期後葉のものである。804 は口縁部が肥厚し、体部で沈線により施文する。串田新式期の在地のものである。805 は須恵器杯 H 蓋である。天井部にヘラケズリを施し、天井部と口縁部の境はなく内湾する。端部は丸く仕上げる。天井部に窯印と推測される×印をヘラ描きする。内面に明瞭に回転ナデが残り、使用痕跡がないことから蓋と考えたが、径が小さいこと、目立つ位置に窯印があることなどを勘案すると、杯 G 身の可能性もある。806 ～ 809 は杯 H 身である。806 は受部が内湾し、口縁部は内傾して立ち上がり、端部を丸く仕上げる。807 は体部が直線的に開き、受部が内湾し、口縁部は内傾して低く立ち上がり、端部は丸く仕上げる。808 は体部が内湾し、受部が水平で、口縁部は内傾して短く立ち上がり、端部は三角形状を呈する。809 は体部が直線的に開き、受部が水平で、口縁部は内傾して短く立ち上がり、断面は三角形状を呈する。806



第 72 図　中野トンビヶ洞遺跡遺物実測図 (1)



第 73 図　中野トンビヶ洞遺跡遺物実測図 (2)

～809は概ね7世紀前半代におさまるものと推定される。810は擬宝珠形の摘みが付く杯G蓋である。返りは短く口縁部より先に出ない。7世紀中頃から後半のものと推定される。811･812は椀Bである。切り離しは糸切りであり、後に高台を貼付け、周縁ナデで仕上げる。ともに方形の高台が内湾する。813は短脚高杯である。814・815は短頸壺である。815は肩部が張り、短く立ち上がった口縁部は内湾する。816は底部に丸みを帯び、フラスコ形状の瓶と推測した。817は横瓶である。外面に敲きの痕跡、内面に当て具痕が残る。818は灰釉陶器皿である。方形の高台が外向きに貼り付く。819は近世陶器のすり鉢である。口縁端部が折れる。原体9条のすり目がある。820は土鈴である。上部に紐を通すための孔がある。下半は欠損し、全体形状を知りえない。821は土製の垂飾である。上下は紐を通すために貫通している。沈線と刺突で表面に加飾する。822は異形部分磨製石器である。縄文時代早期のものと推定される。823～826は石鏃であり、823は凹基無茎鏃、824は平基無茎鏃、825・826は平基有茎鏃である。827は下端に剥離が顕著な楔形石器である。828は連続した微細な剥離で一辺に刃部を形成したスクレイパーである。829は打製石斧である。表面に摩滅痕が認められる。830～832は磨製石斧である。831・832は小型のものである。833は摘みを持つ横型の石匙だが刃部が作られておらず、未製品と推測される。834は潰れの痕跡を表裏両面に持ち、貫通している環石である。835は製作時の敲打痕と研磨痕が残る小型石棒である。飛騨市宮川町塩屋で産出する塩屋石製である。縄文時代後期のものと推定される。836は製作時の研磨痕が顕著な石刀か石剣である。837は独鈷石の破片である。敲打により製作した痕跡が遺存する。

縄文時代では、802～804の中期後葉の土器の他、早期の異形部分磨製石鏃822、後晩期の石棒835、石刀か石剣836、独鈷石837を確認した。また、古墳時代では杯H、古代では椀Bや灰釉陶器を確認した。これらから、縄文時代・古墳・古代の散布地と考えられる。

84　中野西ヶ洞遺跡（遺跡番号21217-06532）

古川町中野字西ヶ洞に所在し、宮川左岸の緩斜面に立地する。

西側には宮川に注ぐ谷川が流れる。30年ほど前までは畑地で、耕作土から土器の採集があったと伝わるが、畑地から牧草地に造成する際に山側から土を寄せて押しならしたとのことであった。過去に試掘確認調査を2回実施したが、遺構・遺物の確認は無かった。聞き取りにより、縄文時代の散布地と考えられる。

85　中野祢宜ヶ洞古墳（遺跡番号21217-06534）

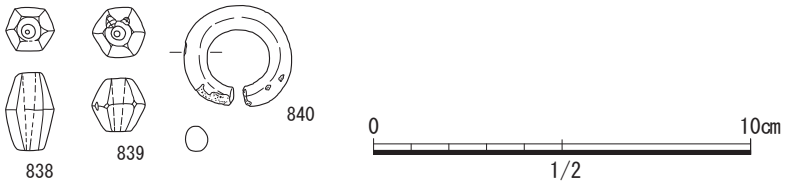
古川町中野字禰宜ヶ洞に所在し、宮川左岸の山麓裾部に立地する。

調査カードでは、開田のため滅失と記録される。踏査では付近で2ｍほどの巨石を確認し、石室石材であった可能性もあるが、墳丘も無く位置の特定には至らなかった。

86　中野宮ヶ洞遺跡（遺跡番号21217-06531）

古川町中野字宮ヶ洞に所在し、宮川左岸の丘陵端部に立地する。

1949（昭和24）年に和鏡が出土したと知られる（土田1961b）。中野白山神社の東南100ｍほどの畑地で地表下0.6ｍの赤土層との境において、松竹に双鳥を配した図柄の直径9.4ｃｍの和鏡とのことである。調査カードには、縄文時代の散布地とされる。



第 74 図　中野宮ヶ洞遺跡遺物実測図

踏査では、緩斜面を段々に造成していることを確認し、遺物の採集はなかった。

千光寺に所蔵されている遺物に、古川町中野字宮ヶ洞出土と記載のあるものがある。中野井西古墳と同様、信包八幡神社古墳のものと伝わっていた（丹生川村教委 1990）。遺物は、切子玉 2 点、耳環 3 点、石製垂飾 1 点であった。今回は、切子玉 2 点（838・839）、耳環 1 点（840）を図示した。838・839 は水晶製の切子玉である。ともに片側穿孔である。840 は金銅製の耳環であり、渡金が一部剥離している。

耳環や切子玉は古墳出土と推測されるが、位置や状況の特定は難しい。いずれにしても散布していた状況で見つかる遺物ではない。図示しなかったが石製垂飾が唯一縄文時代のものの可能性はある。古墳の位置が特定できないため、縄文時代の散布地としての登録が妥当と考えられる。

87　中野宮田古墳（遺跡番号 21217-06530）

古川町中野字宮田に所在し、宮川左岸の丘陵山頂に立地する。踏査では、古墳 1 基を確認した。

戦前は中へは入ることができ、傷んでいなかったと伝わる（菅田 1988）。

墳形は円墳である。墳裾部の径 16.4 m、墳頂部の径 6.8 mを測り、高さ 3.3 mである。

88　中野山越古墳 1 ～ 12 号墳（遺跡番号 21217-06536 ～ 06547）

古川町中野字山越に所在し、宮川左岸の山腹に立地する。

戦前には 12 基の古墳の存在が知られる（多賀 1941）。踏査では、山道に沿って 12 基を確認した。

1 号墳は、道路脇に位置する数段の石積みと盛土を、石室と墳丘の残欠と古墳と考えた。

2 号墳は、道路脇の石積みを石室の残欠と考えた。下手が削平を受けている。

3 号墳は円墳である。墳裾部で長径 6.4 m、短径 6.0 mを測り、高さ 3.4 mである。墳丘上の盛土を呈するが、石室の石材であったと想定される石が散乱する。

4 号墳は円墳である。墳裾部で長径 9.5 m、短径 6.5 m、墳頂部で径 3.5 mを測り、高さは 1.8m である。石室は北東向きに開口する。

5 号墳は円墳である。墳裾部で長径 10.0 m、短径 9.5 m、墳頂部で径 4.0 mを測り、高さは 2.8 mである。墳長部が陥没し、石が散乱する。

6 号墳は円墳である。墳裾部で径 8.0 m、墳頂部で長径 3.8 m、短径 3.5 mを測り、高さ 2.2 mである。

7 号墳は墳丘が径 1.1 mの範囲で残存する。石室は、奥行き 2.5 m、高さ 1.15 mを測る。

8 号墳は円墳である。墳裾部で長径 9.5 m、短径 7.0 mを測る。墳丘から天井石が失われている。奥壁と側壁の下段の石積みのみ、奥行き 1.3 m、幅 0.6 mの範囲で残存する。奥壁の位置から、開口部は南東向きであったと推測される。近くに石が散乱し、石室石材であった可能性がある。

9号墳は円墳のように観察できるが、判然としない。径6.8ｍを測る。墳頂部の中央が陥没し、石室のようにも見える石積みが残る。

10号墳は墳丘のようにも見えるが判然としない。

11号墳は石が散乱し、古墳石室であった可能性がある。

12号墳は墳丘のようにも見えるが判然としない。

89　中野山越遺跡（遺跡番号21217-00165）

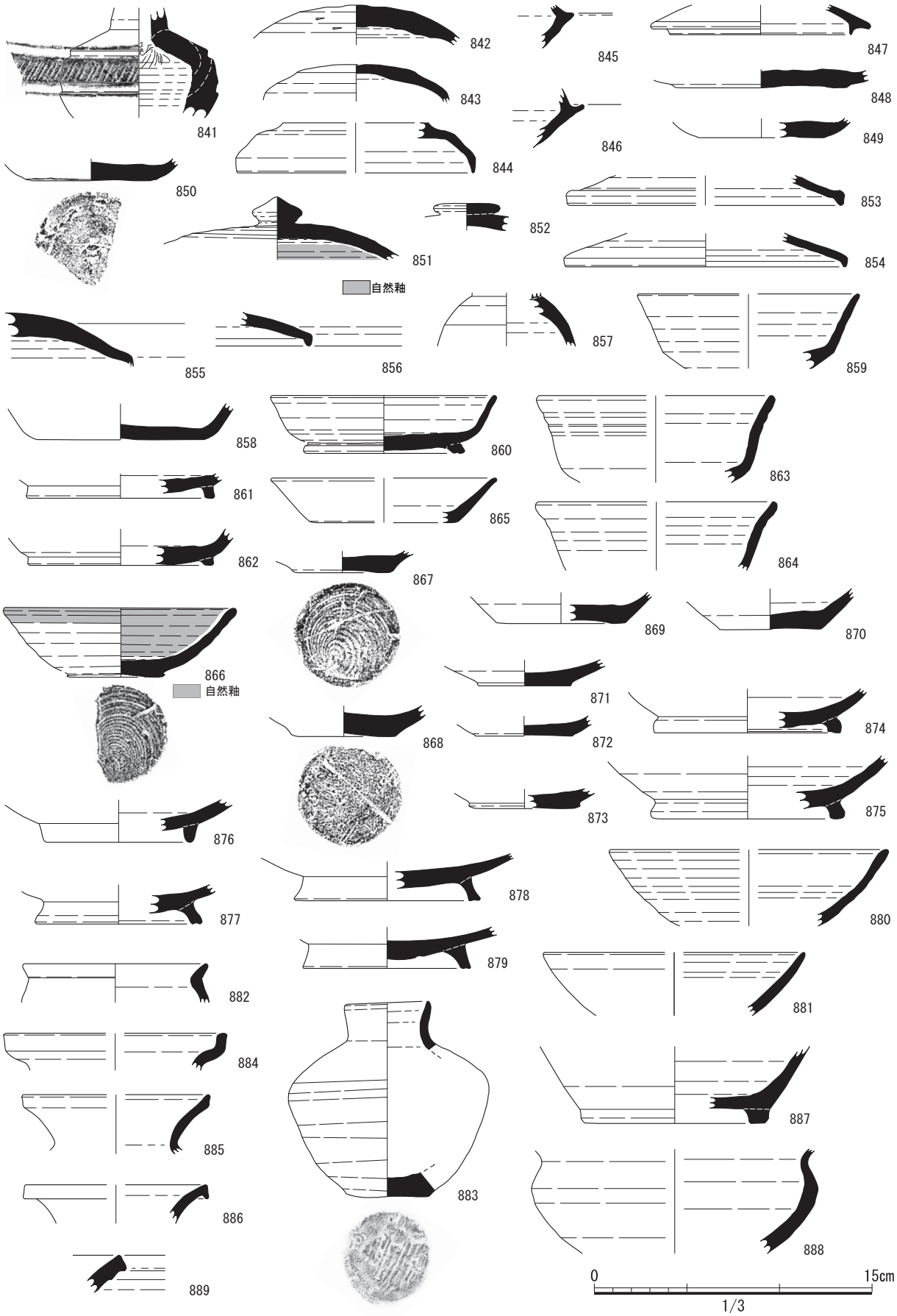
古川町中野字山越に所在し、宮川左岸の河岸段丘に立地する。

1976～79（昭和51～54）年度に発掘調査が実施され、縄文時代中～後期にかけて32軒の竪穴建物跡が発見された（中野山越遺跡発掘調査団1993）。調査地は市の史跡として保存され、出土した遺物は重要文化財に指定されている。2002（平成14）年には、県道に伴って発掘調査が行われ、平安時代の竪穴建物跡を確認した（㈶岐阜県教育文化財団2006）。

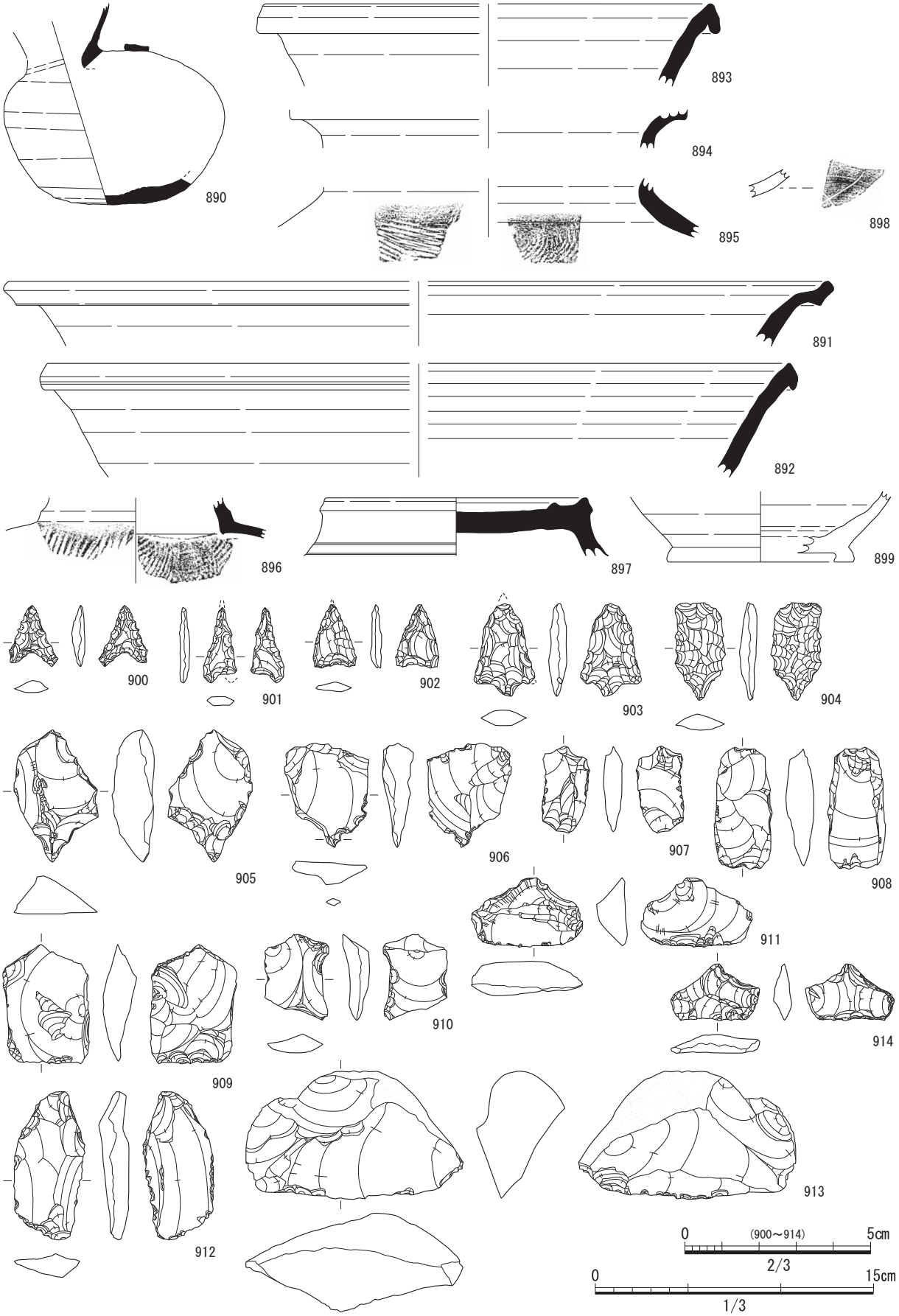
踏査では、既往調査地周辺の段丘緩斜面で遺物の散布が認められた。

遺物では、縄文土器59点、須恵器古墳時代器種67点、須恵器古代器種600点、灰釉陶器18点、瀬戸美濃焼1点、その他中世陶磁器等11点、近世陶磁器10点、近現代陶磁器40点、時期不明陶磁器等5点、石鏃9点、石錐29点、楔形石器26点、スクレイパー75点、その他剥片石器46点、剥片229点、石核3点、打製石斧8点、磨製石斧4点、石棒類2点、その他石製品1点、瓦1点、合計1,244点を採集した。その他にも、寄贈や借用を受けた資料がある。今回は、須恵器57点（841～897）、灰釉陶器2点（898・899）、石鏃5点（900～904）、石錐2点（905・906）、楔形石器3点（907～909）、スクレイパー（910～914）、打製石斧（915～921）、磨製石斧（922・923）、敲石（924）、石棒（925・926）、石刀（927・928）、切子玉（929）、丸瓦（930）を図示した。

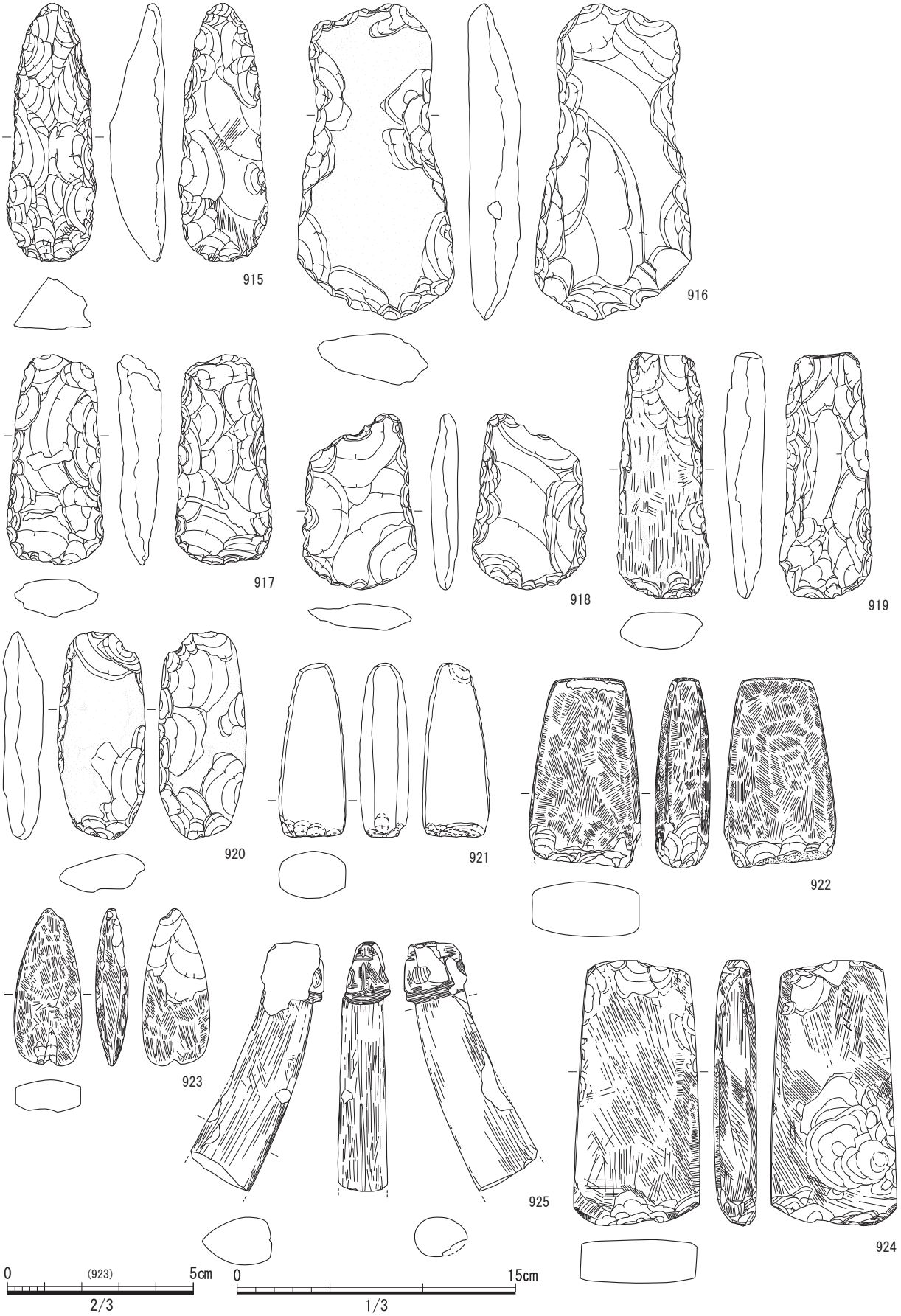
841は瑳である。肩部と胴部の凹線間に櫛描き列点文を施す。6世紀代のものと推定される。842～844は杯H蓋である。844は天井部と口縁部の境に稜がなく、7世紀前半のものと推定される。845・846は杯H身である。845は受部が水平であり、口縁部の立ち上がりは内傾する。846は受部が内湾して端部をまるくおさめ、口縁部の立ち上がりが内傾する。847は口縁内側に返りを持つ杯G蓋である。返りは先端が尖り、口縁部から下へ出る。7世紀中頃のものと推定される。848～850は切り離しがヘラ切りの杯G身の底部破片である。これらは7世紀中頃から後半のものと推定される。851～857は蓋である。851は擬宝珠形の摘みを持つ蓋である。852は偏平な摘みである。853～856は口縁端部が垂下した杯Aもしくは杯B蓋と推測される。857は外面に回転ヘラケズリを施し、摘みになるような立ち上がりがあるため、蓋と考えた。858は杯Aである。体部の傾きが大きく、器高が高い。8世紀前半のものと推定される。859～864は杯Bである。860・861の高台は方形を呈し、862の高台は出尻に近い形態を呈する。これらは8世紀前半のものと推定される。865は体部が直線的に開く杯である。866～873は底部切り離しが回転糸切りの椀Aである。866は内外面に自然釉がみられる。体部は腰がやや張って立ち上がる。8世紀後半以降のものと推定される。867・868は底部にヘラ描きがみられる。874～879は椀Bである。874の高台はやや内傾し、8世紀後半以降のものと推定される。875は高台が方形、876は逆台形を呈する。878・879は長めの高台だが、大きく開く体部の形態から椀Bと考えられる。880・881も傾きが大きく、緩く内湾する器形から、椀と考えられる。882～886は壺である。882は口縁部が短く外反し、小型の短頸壺である。883は胴部の上半



第 75 図　中野山越遺跡遺物実測図（1）



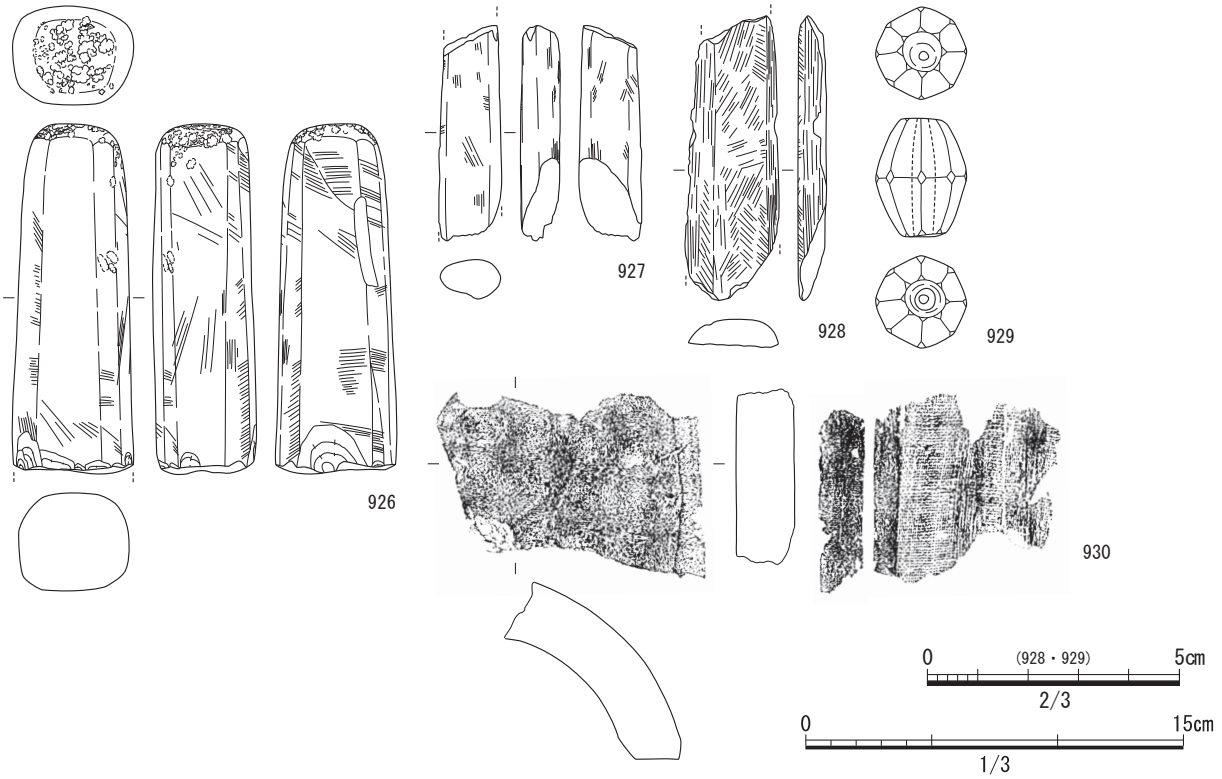
第 76 図　中野山越遺跡遺物実測図 (2)



第 77 図　中野山越遺跡遺物実測図 (3)

に肩部を形成し、口縁部が短く直立する小型の短頸壺である。884 は口縁部が大きく外反し、端部が立ち上がる。小型の壺の口縁部と考えた。885 は口縁部が外反し、端部が三角形状を呈する。破片の先端が肩部へかけて広がるように復元できるため、小型の短頸壺と推測した。886 は口縁に縁帯をめぐらす壺か瓶である。887 は壺瓶類の底部破片としたが、鉢の可能性がある。888 は肩の張りが少なく、壺としたが鉢の可能性がある。889 は外面に弱い稜があり、内面は丁寧に仕上げられる。口縁部は方形を呈し、甕の可能性がある。890 は平瓶である。体部は上方より丸みを持ち、中央で最も張り出した後、下方へ下る。底部にはヘラケズリを施すが丸みを持つ。体部上面外面のほぼ中央に偏平な円形の粘土粒を一つ貼り付ける。口頸部は外反しながら開き、口縁端部は欠損する。891 ～ 895 は甕である。口縁端部の形状では、短く立ち上げる 891、短く折り曲げる 892・893 が認められる。896 は頸部が内傾するが、外面のタタキと内面の当て具痕から甕の頸部から肩部の破片と考えた。897 は円面硯である。898 は灰釉陶器の椀か皿であり、外面にヘラ描きがある。899 は高台が内傾する壺瓶類の底部破片であり、長頸瓶と推測される。

900 ～ 904 は石鏃であり、900・901 は凹基無茎鏃、902 は平基無茎鏃、903 は平基有茎鏃、904 は凸基有茎鏃である。904 は黒曜石製の長身鏃であったものを、再利用のためか上辺を剥離させたものと考えた。905・906 は、摘みを有する石錐である。907 ～ 909 は両端に剥離か潰れが観察できる楔形石器である。910 ～ 914 は縁辺に微細な剥離が認められるスクレイパーである。915 は神子柴型石斧と考えられる。裏面に基部左側面方向からの一次剥離痕を残し、剥片素材と考えられる。荒い剥離の後に階段状の細かい剥離により全体形を成形している。刃部は先端が平坦になるが、概ね弧状を呈する。裏面には研磨痕が若干残る。断面形状は不整両凸レンズ状となる。旧石器時代のものと推定される。



第 78 図　中野山越遺跡遺物実測図 (4)

916 ～ 920 は打製石斧である。916 は円礫利用である。921 ～ 923 は磨製石斧である。921・922 は先端に潰れが生じているため敲石として再利用された可能性がある。924 は裏面の敲打痕が明瞭で、磨製石斧としての利用を終えた後に敲石として転用されたものと考えられる。925 は凝灰岩製の石棒であり、白色を呈する。研磨により頭部を作り出し、基部は丸みを持たせて鎬状に削り出す。縄文時代後期のものと推定される。926 は石棒である。端部は細かい敲打により平坦に仕上げられる。途中で折損しているが、人為的によるものかは判断できない。927・928 は石刀である。研磨により成形されている。929 は水晶の切子玉である。近隣の古墳に由来するものかもしれない。930 は丸瓦である。凸面はケズリが施され、タタキ痕は確認できない。

中野山越遺跡は、縄文時代中期のものを中心に重要文化財に指定されている。今回の調査では、それより遡る神子柴型石器 915 が認められた。遺跡は旧石器時代に遡る可能性もある。縄文時代では、石棒 2 点など多くの石器・石製品を確認した。また、古墳時代では瑳や杯 H 蓋や身、切子玉など、古代では須恵器杯 B・椀 A などに加え、円面硯と瓦の確認もあった。時代を通じて何らかの営みはあったものと推測される。なお、中世以降の遺物も確認したが少量であり、図示できるものもなかった。旧石器時代遺物も少ないため、縄文・古墳・古代の集落遺跡と考えられる。

90　西ヶ洞廃寺跡（21217-06522）

古川町寺地字西ヶ洞に所在し、宮川の支流殿川右岸の山腹に立地する。

2002（平成 14）年に県道に伴い、発掘調査が行われた（㈶岐阜県教育文化財団 2006）。そこでは、平安時代の山林寺院であり、礎石列や寺院に伴う工房の可能性が高い鍛冶関連遺構を確認した。また、十能寺と刻書のある須恵器が見つかっており（笹ヶ洞区 1985）、寺名が分かる古代寺院の一つである。

踏査では、樹木が生い茂っており現状を把握するのが難しい状況であった。遺物の採集もなかったが、飛騨の山樵館収蔵庫に数点の遺物が保管されていた。収蔵に至った経緯は不明である。今回は灰釉陶器 2 点（931・932）を図示した。931・932 はともに椀の口縁部破片である。931 は口縁部が緩やかに外反し、端部は丸く仕上げる。932 は体部から口縁部にかけてゆるやかに外反し、端部は丸く仕上げる。

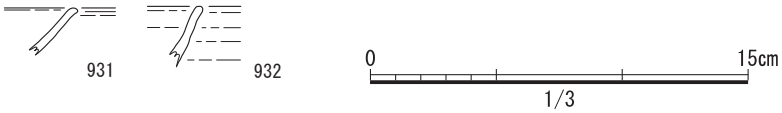
これまでの発掘調査では、平安時代の山林寺院と考えられている。

91　西之御堂遺跡（遺跡番号なし）

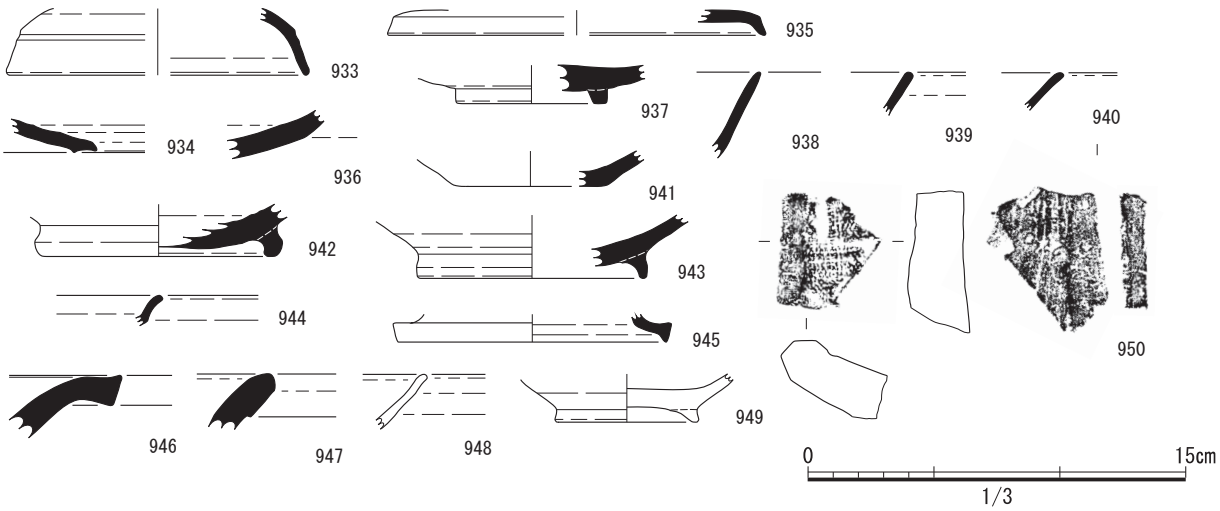
古川町増島町に所在し、宮川の支流荒城川左岸の沖積地に立地する。

踏査では、一帯は宅地化しており、その空閑地において疎らに遺物の散布がある状況を確認した。

遺物では、須恵器古墳時代器種 1 点、古代器種 66 点、灰釉陶器 3 点、近世陶磁器 2 点、瓦 1 点、合計 73 点を採集した。今回は須恵器 14 点（933 ～ 947）、灰釉陶器 2 点（948・949）、瓦 1 点（950）を図示した。



第 79 図　西ヶ洞廃寺跡遺物実測図



第 80 図　西之御堂遺跡遺物実測図

933 は杯 H 蓋である。天井部と口縁部の境に凹線を有する。口縁端部は丸くおさめる。7 世紀前半から中頃までのものと推定される。934 は杯 G 蓋である。口縁部内面に短い返りが付く。935 は口縁端部が垂下する蓋と推測される。天井部と口縁部の境が明瞭である。936 は底部に回転ヘラケズリを施すため杯 A と考えられた。937 は高台が方形を呈する杯 B である。底面の内側に高台を貼り付けることから 8 世紀後半以降のものと推定される。938 ～ 940 は杯の口縁部破片である。椀の可能性もある。941 は底部に回転糸切り痕が遺存するため、椀 A である。942・943 は椀 B である。高台が三日月形状を呈することから、9 世紀後半のものと推定される。944 は体部と口縁部の境が強く屈曲した後、口縁部が外反する。ここでは高杯としたが、盤の可能性もある。945 は高杯脚の破片である。946・947 は壺甕類の口縁部破片である。946 は口縁部に縁帯を有するため、甕と推測される。948 はゆるい傾きで開く灰釉陶器皿である。949 は灰釉陶器椀である。高台が逆台形を呈するため、9 世紀前半から中頃までのものと推定される。950 は平瓦の破片である。凹凸両面の測縁側を丁寧に面取りする。凹面には布目圧痕とともに横方向の粘土合わせ目のような痕跡が観察できるため、粘土紐により作られた可能性があるが、小破片であるため判然としない。凸面はケズリが施され、何らかのタタキ痕跡が認められるものの用具を読み取ることはできない。

古代を中心とした遺物が散布し、44 点の遺物を採集した一画もある。しかしながら一帯が宅地化されており、採集遺物は客土の可能性もあること、また地形復元から遺跡範囲の確定が難しいこと、さらに聞き取りでも遺物が採集されたとの話がないことから、現状では遺跡登録しないこととする。

92　沼町川原遺跡（遺跡番号 21217-11754）

古川町沼町字川原に所在し、宮川右岸の河岸段丘に立地する。

遺物では、須恵器古墳時代器種 5 点、須恵器古代器種 38 点、土師器古代器種 1 点、灰釉陶器 1 点、瀬戸美濃焼 3 点、近世陶磁器 3 点、時期不明陶磁器 6 点、合計 57 点を採集した。今回は、須恵器 7 点（951 ～ 957）を図示した。

951・952 は杯 H 蓋である。951 は天井部と口縁部の境に稜がみられる。952 は明確な稜を持たずに内湾し、口縁端部を丸く仕上げる。ともに 7 世紀前半から中頃までのものと推定される。953 は底部

にヘラケズリを施し、杯 H 身である。954 は口縁端部を垂下させた蓋と推測される。955・956 は高台が方形を呈する杯 B である。955 は方形の高台を外向きに貼付ける。956 は底部の内側に高台を貼付け、8 世紀後半のものと推定される。957 は体部が緩やかに外反しながら開き、端部を丸く仕上げる椀である。

古代を中心とした時期の遺物が集中的に散布する一画であり、墓地となっている土盛りがある。土盛りは古墳の可能性もある。古墳・古代・中世の散布地と考えられる。

93　沼町竹原遺跡（遺跡番号なし）

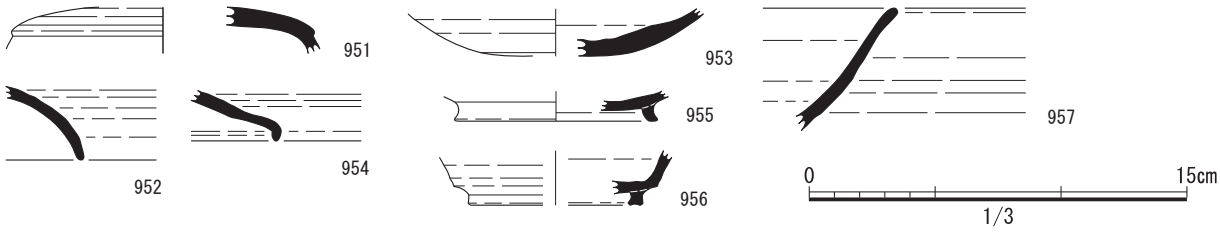
古川町沼町字竹原に所在し、宮川右岸の山麓の平坦地に立地する。

1924（大正 13）年に古川町沼町字竹原の壊された古墳で、碧玉 2 個と三環鈴が発見されたことが知られる（犬塚 1939・岐阜県博 1992・大参 1986・多賀 1941・田中 2016）。

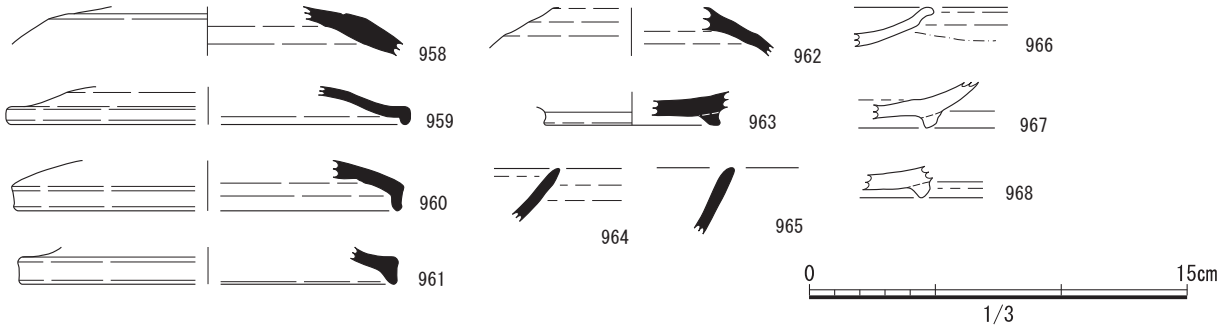
遺物では、古墳時代器種 1 点、古代器種 47 点、灰釉陶器 12 点、合計 60 点を採集した。今回は、須恵器 8 点（958 ～ 965）、灰釉陶器 3 点（966 ～ 968）を図示した。

958 は天井部にヘラケズリを施し、蓋と推測される。959・960 は口縁端部が垂下し、杯 A もしくは杯 B の蓋と推測される。961 も蓋と考えたが、端部が太く三角形状となり、別器種の可能性もある。962 の蓋は、内外面にナデを施すため、大型のものの可能性がある。963 は杯 B であり、やや外向きの逆台形高台を貼り付ける。964・965 は杯の口縁部破片である。964 は傾きから椀の可能性もある。966・967 は灰釉陶器の皿であり、968 は椀である。967・968 は三日月形状の高台を貼り付けるため、9 世紀後半以降のものと推定される。

犬塚行蔵収集品（高山市所有）の資料に、竹原古墳出土とされる三鈴付杏葉がみられ、聞き取りでも古墳があったとされる。今回の採集地点は聞き取りで得た竹原古墳の位置と一致せず、また現状宅



第 81 図　沼町川原遺跡遺物実測図



第 82 図　沼町竹原遺跡遺物実測図

地であり、採集される範囲が限られている。このため遺跡登録しないこととする。

94　沼町天王洞古墳（遺跡番号 21217-06502）

古川町沼町字天王洞に所在し、宮川右岸の山腹に立地する。踏査では、古墳1基を確認した。

墳形は円墳である。墳裾部で径 11.0 m、墳頂部で径 5.0 mを測り、高さ 2.5 mである。西側に大きな石積みが見られるが、関係は判然としない。

95　沼町日明遺跡（遺跡番号なし）

古川町沼町字日明に所在し、宮川右岸の河岸段丘平坦地に立地する。

「沼町字日明」と記載された札が入った遺物が飛騨の山樵館収蔵庫に保管されていた。採集年は「昭和 52 年」とも記載されていた。内容は、須恵器1点、土師器4点であり、須恵器1点（969）を図示した。969 は杯 G 蓋である。返りが口縁部より大きく下へ出る。出土状況が不明であり、現地は耕地整理が終了して地形復元が難しいため、遺跡登録しないこととする。

96　沼町南洞古墳（遺跡番号 21217-11791）

古川町沼町字南洞に所在し、宮川右岸の山腹に立地する。踏査では、古墳1基を確認した。

墳形は円墳である。墳裾部で長径 11.0 m、短径 10.0 mを測り、高さ 3.0 mである。

97　野口城跡（遺跡番号 21217-00142）

古川町野口から袈裟丸にかけて所在し、宮川右岸の丘陵山頂に立地する。

『岐阜県中世城館跡総合調査報告書』で詳細な検討がなされている（岐阜県教委 2005）。

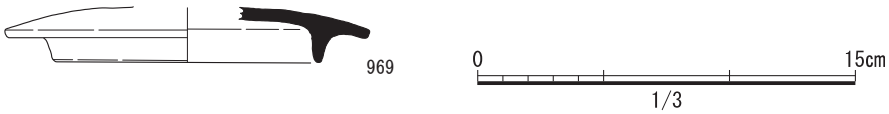
城郭は大きく3つの曲輪からなる。最も大きく主郭と考えられる平坦地からは、古川盆地がよく見渡せる。盆地最北に位置することから、姉小路氏に関わる山城跡の可能性が高い。次に注目されるのは、主郭から尾根続きの曲輪直下に設けられる畝状空堀群である。これは、白川郷から保峠を越えて古川盆地に侵攻してきた金森氏に備えるため、三木氏が設けたものと推測される。

踏査では、良好に曲輪、竪堀、切岸、畝状空堀群が遺存することを確認した。

98　野口辻垣内遺跡（21217-11792）

古川町野口字辻垣内に所在し、宮川の支流戸市川左岸の北東向きの河岸段丘上に立地する。

調査の際には、遺物を採集すると共に、土地所有者から耕作時に採集した遺物の寄贈を受けた。遺物は、縄文土器5点、須恵器古代器種3点、近世陶磁器1点、石鏃1点、磨製石斧1点、合計 11 点



第 83 図　沼町日明遺跡遺物実測図